祝
高崎高校創立百周年
記念号

「文武両道」の精神によせて

――創立百周年を機に――

翠巒体育会
会長　山口正敏
（卓球部・58期）

本年五月二十日の創立百周年記念式典をもって、高崎高校創立百周年記念事業は、来年三月に『百年史』の刊行予定をのこして、ほかはすべて成功裡に終了しました。古色蒼然とした講堂は同窓会館「翠巒会館」に、指月庭もまた新しく生まれ変わり、新たな歴史を刻み始めることになりました。ここに、翠巒体育会の皆さまが同窓会の理事、学年幹事、PTAの役員などそれぞれの立場から各事業にご協力されましたことに対して、心より感謝申し上げます。

高崎高校には「文武両道」のすばらしい伝統があります。その一翼を担ってきた運動部の歴史を振り返ってみたいと思います。

明治三十年（一八八七年）に県立尋常中学校の群馬分校として、高崎市赤坂町の長松寺に産声を挙げた当校は、翌年に上和田町の現在の第一中学校のところに移転しますが、この年に撃剣部と野球部が始まります。明治三十五年（一八九二年）には庭球部と剣道部が加わり、同時に学芸部も発足をして「文武両道」の精神が奨励されました。

昭和に入ってからは、三年に野球部が県大会で四連覇、庭球部は五年、六年と二年続けて全国大会で優勝のほか、八つの大会で優勝をするという、すばらしい活躍ぶりでした。七年に野球部は県大会で、水泳部は近県大会で、庭球部はダブルスで全関東大会で優勝をしています。射撃部、機械体操部の活躍もめざましく、昭和初期の高崎高校は、運動部の輝かしい時代でありました。当時の時代的背景がしのばれて、興味深いことです。

大東亜戦争をはさんで、その後、学校教育は方向転換を余儀なくされますが、昭和二十一年にラグビー部が誕生し、二十三年にはバスケット部と共に国体に出場しています。その後のラグビー部の活躍はすばらしく、二十八年、三十年に国体で全国制覇を成し遂げます。また四十三年には、サッカー部が初めて国体に出場し、その後もバスケット部や庭球部、水泳部、陸上部がインターハイや国体に出場を果たしました。

そして五十五年にはついに野球部が甲子園大会に初出場、開校以来八十四年目の快挙として、卒業生ともども全校が沸き返りました。その後もサッカー部やバスケット部、庭球部、ラグビー部も全国大会に進出しています。

このようななかで翠巒体育会も四半世紀を迎えようとしていますが、地域社会における当会会員の活躍はすばらしいものがあります。平成七年、バレーボールの「翠巒クラブ」は、全日本バレーボール協会の男子選手権大会連続十回出場の表彰を受けていますし、当会副会長の佐藤義夫君（五十八期）が高崎市の体育功労賞を受賞しています。これは体育会にとっても大変に名誉なことです。

現在、各クブラで記念誌を創ることが盛んになっています。すでにバスケット部、ラグビー部、バレー部では制作されました。サッカー部は制作中とのことですが、そうした過程を通じて、世代を超えた新たな連携の絆が深められています。

当会としても、次なる四半世紀に向けて「心のつながり」を基本におきながら、現役とOB間、またOB同士の交流を盛んにしていきたいと思います。また、OBの地域社会との関わりもいっそう強めるべく活動をしていきたいと思っています。先輩諸兄のご理解とさらなるご支援をお願いしたいと思います。

最近の教育を考えるとき、「文武両道」と言われながらも、受験勉強を中心とした「勉強」に重点がおかれているのを否定できません。しかし高校生活の三年間に、スポーツを通じて青春の汗をありったけ流し、エネルギーをぶつけ合うことは、ひじょうに貴重な経験となるのです。人間形成にとって計り知れない大きなものがあると思います。それを大切にするためにも、先輩諸兄の築き上げてきたすばらしい活躍と伝統を現役の諸君と共に継承し、さらなる歴史を創っていきたいと思っています。

ごあいさつ

群馬県立高崎高校
学校長　古川　功

翠巒体育会報も回を重ねてここに第16号発行の運びを迎えました事は、まことに御同慶の至りであり、山口会長様を初めとする役員会員の皆様のみごとな和と結束力を示す象徴として、心より敬意を表する次第であります。

皆様のおかげ様をもちまして、母校高崎高校は本年創立百年という歴史的な節目の年を迎え、同窓会員である翠巒体育会会員の皆様方からひとかたならぬお力添えを賜り、広汎な浄財活動を積極御推進賜りました事に、誌上をお借りして厚く御礼申し上げる次第であります。

また、過日の創立百周年記念式・記念祝賀会には大勢の会員各位に御参加いただき、あのように盛況裏に記念行事をとりおこなえました事、重ね重ね心より御礼申しあげます。

式典時の生徒代表謝辞にもありましたように、先輩方の残された業績の数々は時に在校生にとってこの上ないうしろだてであるとともに、時にのり超え難き挑戦課題ともなっておりますが、伝統の3F精神での文武両道を期す進取精進の若さをもって励みあうことを誓った生徒達であります。「プロセスは自分達がつくる。結果はあとからついて来る」を合言葉に、他のいわゆる進学校を寄せつけぬ在校生の強味はまさに諸先輩の培われた伝統の力によるものであり、スポーツマンシップにのっとった母校愛・後輩愛のおかげと痛感する昨今であります。

御承知の通り近年は、本会設立時といささか様相を異にする県下の高校状況となっておりまして、運動部活動での実績を第一校是とする私学の抬頭や、県内のみならず県外からもジュニア優秀選手を特典をもって優先入学させてチーム強化を図る施策等も広まりつつあって、総じて公立普通科校、なかんづくいわゆる進学校での運動部活動実績が頭うちとなる傾向がみられるようになって来ております。

しかしながら、その影響は受けつつも我が高崎高校は他校から瞠目される成果をあげつつあることも事実であります。

創立１００周年記念式典

例えば、百周年を迎えた平成九年度高校総体においても、出場13種目中バスケットの優勝を筆頭に陸上部の種目総合三位、ラグビー、サッカー、柔道、軟式野球が第三位又はベスト4にくいこみ、テニス、山岳、バレー、卓球等もベスト8以内を確保するなど、公立普通科の中では断然トップの戦果をあげ、五競技種目が関東大会出場権を獲得し、トータルして4年連続県総合第三位を勝ちとっているのであります。同じ総合三位とはいえ、四位と0.5差であった平成七年、10点差をつけて単独三位をキープした平成八年、そして四位校に肉迫した平成九年というように、着実に総合力アップを果たしているというのも喜ばしき実相であります。

また、平成八年度、県要請によって実施した本校の調査研究によれば、三年間部活動や多忙な特別活動をやりぬいたいわゆる「両道者」と、特に自主活動体験なく卒業していったいわば「単道者」の進路志望達成状況を一ヶ年かけてつぶさに追跡調査してみたところ、結果、あれほどの学習時間不足をかこち、日々の練習活動を積みあげていったはずの「両道者」の方が、質量共に単道者をはるかに凌駕する進路達成度を示していることが数値をもって把握することができました。

詳細は省きますが、両道者88％、単道者68％もその一つであります。これは、部活動自主活動を通じて苦闘しつつ自らの可能性に挑戦していく事がいかに人間としてのたくましさを培うこととなるかの証左だと受けとめております。

百周年という輝かしい伝統をもつ本校であります。今後とも、翠巒体育会を初めとする先輩各位の御激励をいただきつつ、生徒各自が自らの活性化を期して新たなる高々ポスト百年の主役となっていくよう育成して参りたく存じます。倍旧の御支援をお願いするとともに、翠巒体育会の益々の御発展を心より祈念いたしまして挨拶といたします。

同窓会館「翠巒会館」

翠巒体育会創立時をふりかえって

翠巒体育会
顧問　國峯　善次郎
（サッカー部・50期）

翠巒体育会創設二十有余年、母校創立百周年記念の発刊を、心から御慶び申し上げます。

創設に当り、当時高々は井上房一郎先輩（15期・井上工業社長）が骨身を惜まず面倒を見て下さっていた、昭和二十二年サッカー部創部以来何かと御世話に成り、OB会にも数多く出席戴いた。時々「僕も高令なので、君達若い人達で高々の面倒を見て呉れないか。」と言われ、同期の反町（バスケット）、下田（応援）君、又バレー部の織茂君等々に、井上さんに代って？仲間造りをし乍ら高々の後援をしようと元気のある、運動部OB諸君に話を持ち掛け、全OB会代表諸兄の賛同を得て体育会発足を見た。

当時の同窓会活動は理事会・常任理事会・又同窓会報・維持会費の納入状況も考えさせられる事が山積して居た。

三月と言っても寒い体育部官室、懇親を深め乍らの「御園寿し」常磐町セントラルハイツ内にあった高島屋ローズ等で会合を重ね、昭和四十九年五月十五日、野球部OB中島正氏議長により会則審議を始めとした設立総会が、旧翠巒会館に於いて開催され、翠巒体育会が発足した。

同年四月より「運動部入部の勧め」を全校生徒に配布、五十年には応援旗（六月）寄贈、インターハイ出場選手に金一封を送り、五十年十月十日、体育の日を期し会報翠巒体育創刊号を作成現在に至って居る。以後発刊の都度、同窓会常任理事会の席に配布、同窓会長原一雄氏から「同窓会報もこれに習え」の一言で現在の同窓会報が出来た。（現同窓会報は昭和五十七・八年頃から現在のスタイルで発行された。）

創設時の小山同窓会会長、原、柴山、現在の小山会長と歴代同窓会長には大変御世話に成り、同窓会の黒字的な存在とし貢献し、本部幹事会の発足、大勢の体育会役員が同窓会役員に就任され、同窓会活動の発展に尽力され、体育会の活動の理解も深まり同窓会よりの活動補助金支出を見る事が出来た。

創刊号で野球部OB会の本多君（57期）が「高々野球部の黄金時代は必ず来る」との寄稿文に高々野球部の甲子園出場は夢の夢と思って居た処、昭和五十六年三月選抜大会出場、続いてサッカー部選手権大会全国16位と母校の快挙に湧いた。（ラグビー59年、其他の部でも関東大会、全国大会へと大勢出場した。）県高校総体も二位、三位と現役諸君も頑張り、体育会関係者は元より同窓会、関係者は元気が良かった。

残念な事に甲子園で野球部は一回戦で涙を飲んだ。結果として募金の一部が同窓会に寄託され、このお金が翠巒育英会誕生の基金に成って、現在大勢の受益者、そして基金協賛者があり、同窓会事業として冠たる名誉を全国に発信している。

創設時元気に活躍して居た勝俣君（ソフトテニス）、織茂君（バレー部）、竹内君（陸上部）、多胡君（水泳部）、高橋さん（バレー部）、小川君（サッカー部）、そして田中君（サッカー部）等々大勢の故人に対して心から冥福を祈りたい。

歴代校長では中野、中沢、水穴、磯貝、金井、堀口各氏と現在の古川校長には何かと御世話に成った。残念な事に中沢、水穴両校長は故人に成ってしまい感無量の思いがある。

事務局では川嶋、中原、富田、小林、桜井各先生に御世話に成り、特に川嶋先生には創設期、会報発行で御自宅に深夜に至る迄、数十度御邪魔し御迷惑を御掛けし、自身会員でもある故、会の基礎造りに尽力して戴いた。

又菊地（バレー部）君高女校長、大須賀君（陸上）県スポーツ振興課長、森田君（体操）前橋養護高校長を始め大勢の会員が小・中・高の校長に就任している。

会員諸氏も二十有余年、県議橋爪（バスケット）、榛名町々長石井（柔道）、鬼石町町長関口（柔道）、市町村議員も多数、又各企業法人の責任者、代表者が続々と各紙を賑わしている。

しばし眺めると自分を始め白髪の会員が多く成った事は体育会の歴史の重みを物語る（？）と承知するが、大勢の人材を輩出し一人一人がスポーツ文化を持って居る事は事実で、近い内、体育会でスポーツ文化、企業人育成、政治経済等々の特集を組むのも面白いのではないかと思う。

近年現役諸君も頑張り、スポーツ紙を賑やかに飾り始め、総体三位の成績は創設時を偲ばせるものがあり、学校当局始め我々OB会員に取って、若い諸君からの何よりもの贈り物に只々感謝〳〵である。

創設時より十二年間会長職で会員皆々様に御世話に成り、大勢の方々に支えられ、何度かの運営危機を乗り越えられ、岩田君に会長職をバトンタッチ出来た時は、赤城・榛名の山々の夕映えが素適に見えた。

今後も山口会長を中心に、体育会の益々の発展を祈念したい、馬令を重ねての人生の佳境に入った今、風体こそ老境に入ったが、流れる血潮は鮮明である。

今後も会員諸君に教えを戴き乍ら、母校、体育会、同窓会の発展に微力を尽したい。まさに若き血、翠巒健児、百までもである。

（初代会長）

高崎高校創立百周年記念特集

青春の絆

―運動部の想い出―

陸上部

陸上競技と仲間

大須賀正臣（57期）

小学校の運動会の徒競走で毎年テープを切っていたことが、私のその後を方向づけたというのは、何とも面白いことだと思っています。

高崎一中で、三年夏の市と県の中学校総体で、二〇〇m・八〇〇mH・八〇〇mRの三種目に優勝したものの、当時は陸上競技にそれほど魅力を感じていたわけでもなく、高校でも続けるかどうか、春休みの間も曖昧な気持で過ごしていました。

人生の面白さは、過去を振り返ってみたとき、その節目節目に〝もし……〟〝たまたま……〟がつきまとうことでしょうか。

たまたまキャプテン・小沢興康先輩に声を掛けられ入部、新入部員は、高崎一中での仲間、木暮登・渋谷晃正・菅沼貞雄・皆川淳一のみ。

監督は、現役ばりばりの「ベース」（ベース盤そっくりの顔付きの内田光之先生、現在も健在）

中学総体後高校入試のために一応猛勉強をし（それでもやっと入学）トレーニング不足、期待はしていなかったものの入学一ヶ月目の県総体一一〇mJHで優勝、余勢をかって関東大会で三位になり表彰台に、夢のような出来事でした。

私一人のための壮行会に講堂に全員が集まり、〝翠巒影を浮かべては〟に送られて酒田市へ、やはり全国大会では日頃のいい加減な練習では歯が立たず、あえなく予選で敗退。

この間勉強でちょっと手を抜いたら二科目赤点をもらって落第寸前、当時落第は当たり前で、自分で努力をしないものはどんどん置いていかれるといった厳しいまたしごく当たり前の時代でした。

二年時は、四種目に入賞したものの、関東大会では不調というより甘く見ていた感があり全種目準決勝で敗退、失意のうちに頭を垂れて帰校。

それからの一年間は目の色を変えて練習をしました。

二年後半から仲間は受験勉強のためあまり練習に参加せずほとんど私一人、しかもグランドは多くの部が入り乱れていて危険この上なく、仕方なく北高崎駅近くの自宅から自転車で学校へ、授業が終わって城南陸上競技場へ、終わって自宅へという三角形を一巡する生活を続けました。

その甲斐あって三年次は三種目に入賞し関東大会へ、一一〇mJHは大会新記録で優勝、念願の一番上の表彰台に立つことができ、また一〇〇m四位・二〇〇m五位と納得のいく成績を上げることができました。

富山市での全国大会では優勝候補の一角に名を連ねていたものの、スタートから13・72mにある第一ハードルを飛び越すときに肉離れをおこして棄権。

高校時代の陸上競技生活はこのようにして幕を閉じました。

その後大学で四年、教員になって五年、都合一五年にわたる陸上競技生活でしたが、やはりこの高校三年間の〝部活動〟と〝勉強〟のみ、一切の遊びなしの生活が一番充実しており、今でもなにかにつけて懐かしく思い出されます。

アパート・貸家・ビル管理
県知事
(8)1797号
広田住宅センター
高崎市田町９２ぐんぎん前
☎ 0273−25−0055
エイブル　ＦＣ高崎店

＊＊さがします、あなたの住空間＊＊
群馬県知事(11)第４２４号
株式会社大陸不動産
TAIRIKU
高崎市宮元町１０８番地
ＴＥＬ（0273）22−4031

それにつけても陸上競技を通してかけがえのない多くの恩師・先輩・仲間・後輩に出会い、それを支えに今日までやってこられたことを幸せに思っています。

合宿

横尾　信男（65期）

私が在学中の合宿所は正門を入って突き当たりが理科室で、その手前の右側に木造二階建てでした。

一階は各運動部の部室、二階は南側に廊下があるだけであとはそっくり畳が敷いてあるだけのブチ抜きの和室でそこが合宿所でした。

陸上部の合宿は毎年四月後半のゴールデンウイークの頃で、一年生の時は家庭公認で一週間を外泊できることにワクワクしていました。

食事は賄いのおばさんが通ってきて作ってくれましたが、合宿中何回かカレーが登場し、夕飯はいいのですが、前日の残りのカレーを朝飯や昼食に食べるとその後の練習で必ず吐いてしまい、現在でもカレーを食べて胸やけがすると当時のことを思い出します。

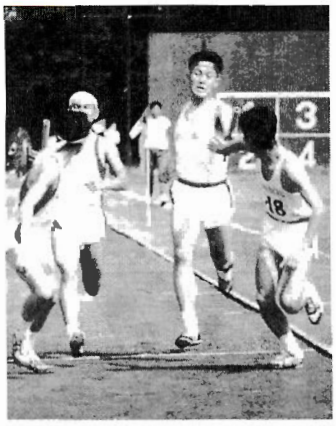
また、夜は先輩の一人が胡椒を持ち込んで掛布団の襟元に撒いておいたので電気を消してから大騒ぎになり、暗闇のなかで蓋を取った胡椒の瓶が飛び交い全員が目を真っ赤にしクシャミをしながら暴れまわりました。

それからしばらくは胡椒の匂いを嗅ぐとその時の苦しさを思い出し、練習帰りに学校前の山田屋でラーメンを食べても胡椒を使えませんでした。

そんなわけで、私の高高での合宿の思い出は練習の苦しさよりも食べ物にまつわることばかりのようですが、三年生の春の県の強化選手に選ばれて高体連の合宿に参加しました。周りは高崎商業、桐生工業をはじめ当時の強豪校の選手ばかりで高高からは私一人の参加で、内心気後れしながら城南の陸上競技場に集合しました。

練習が始まってみたら案の定、最初の準備運動で四〇〇メートルトラックを何周も走らされ、それだけでもついて行けず日頃の練習の少なさを痛感して帰ってきました。

とは言うものの、その頃人の何倍も走ったおかげで中年を越えたいまでも会社の体力テストでは同年代のトップクラスの成績を保っていられるものと思っています。



弁護士　坂本　正樹（陸上　71期）
高崎市本町一七二番地
TEL〇二七三(二七)七七一七

滝沢武司先生の思い出

中村　信勝（81期）

現在、私は中学・高校で教職の身にあります。幸いなことに陸上競技部の顧問となり、自分の好きな陸上競技に指導者として携わっています。その関係で歴代の高崎高校陸上競技部の顧問の先生に接する機会が多く、今もいろいろとお世話になっています。その中でも、私が高校に在学していたときに顧問をされていた滝沢武司先生の思い出を書きたいと思います。

私が高校時代の滝沢先生の姿を思い浮かべますと、初めに出てくるのは麦ワラぼうしとサンダルばき姿の先生です。夏になりますと、その姿でグランドに出て来られ、黙々と草かりをしていました。夏の暑い盛りで、少しでも楽をしようと考えている私たちにとっては、無言のプレッシャーとなり、練習に気合が入ったのを覚えています。大会では、写真判定の審判をなさっていた先生は忙しく、私たちとはなかなか話ができませんでした。しかし、本当の勝負所になりますと、写真判定室から降りて来まして、スタート数分前の選手に「一発、引っかけろ」と気合を入れるのです。その時はその意味を深くは考えませんでしたが、今、改めて考えてみますと、マージャンやパチンコなどで分かるように、勝負ごとにおいて「一発、引っかける」ことがいかに重要か、分かるような気がします。そんな勝負師である先生にも、「しゃぶ」というニックネームがありました。どうして、このようなニックネームがついたかは、私が記憶している限りでは二説ありました。一つは、「しゃぶしゃぶ」が好きだったからという説、もう一つは、麻薬の「シャブ」からきているという説です。どちらが本当か、また別の説があるのか、定かではありませんが、永遠のミステリーなのでしょうか。

今回、滝沢先生の思い出を書かせていただき、自分でも忘れていたことを再発見した気がします。先生の教えは、高校時代には直火のように熱く感じ、現在になっても遠赤外線のように温かく思い出すことができます。この教えを忘れずに、生きて行きたいと思います。

卓球部

講堂と卓球部

与口　健一（61期）

昭和三十四年入学と同時に卓球部に入部した。中学でも卓球をやっていたお陰で迷うことはなかった。当時通学で正門を入ると必ずや前井上工業の社長井上氏がバラ園の手入れをされており、大変お忙しい身でありながら毎朝早くからと感心させられたものである。そのバラ園の右奥に旧講堂があり、その講堂が我が卓球部の練習場であった。

古くほこりっぽく広いその中で毎日練習をした。時には講演会の後など百脚近い長椅子を動かしながら掃除をし卓球台を並べ、練習前に疲れてしまった思い出もある。

夏期合宿は今はもう無いがこれも又古くきたない合宿所がプールの近くにあった。毎夏ここに寝泊りし数日間の合宿を行なった。その当時はまだ合宿というと諸先輩が来て一緒に練習をしてくれた。練習というよりは後輩をしごきに来たようなものである。観音山正面石段三往復との声が掛かりいっせいに部員が走る。三往復目を走り終る時に先輩が「お前はまだ二回だからあと一回だ」と言われ反論したが先輩の竹の棒の怖さにもう一度往復走ってしまった。ウップンを晴らそうとその晩合宿所でビールにタバコを少し溶かしたのをその先輩に飲ませたら吐いてしまい驚いた。お詫びする次第です。

私が三年になり部長になった時、高女の卓球部との合同練習をした。男子しかいない高々で女子との合練が出来たのは運動部では我が卓球部だけではなかったかと、楽しい思い出のひとつである。

当時の顧問松原純一先生も御健在で、現在は千葉におられるが、大変お世話になったことを今なお感謝しておる次第です。思い出深い旧講堂も百周年事業の翠巒会館建設の為取り壊され、二度とめぐり合うことのない節目の年となった。

在校当時は卓球部としてたいした実績は残せなかったが、卒業以来お付き合いさせていただく多彩な先輩、同僚、後輩との今なおうれしい交わりを今後とも人生の宝とし、卓球部に乾杯。

卓球の絆

須藤　順一（67期）

この度原稿の依頼を受け思いのままに青春の足跡を辿ってみたいと思います。私と卓球の出会いは中学入学と同時だった。数あるスポーツの中でいろいろと迷ったが、天候にも左右されず、屋内で通年できることに魅力を感じ入部した。中学の三年間は卓球一筋で頑張ったが、成績は振わず市の団体戦で三位と甘んじ県大会出場は夢と終った。

そして高々に入学。今度は迷わず卓球部を選んだ。高校ではインターハイや団体出場の夢をかけ、先輩達の指導のもと、激しいトレーニングや練習を重ね、又恒例である恐怖の夏合宿を通して技術や体力の強化を計ってきた。そのかいあって二年生のインターハイ予選の時、団体戦の中のダブルスで当時県No1の桐高ペアを私と馬場君のペアは接戦の末勝利を治めた。

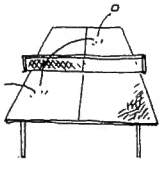
この喜びは大きくさらに飛躍しようと誓った矢先、馬場君が膝の関節炎で卓球を続けることが困難となり、ついに退部してしまった。スポーツにけがは付きものと言うがこの時程残念に思ったことはない。その後の大会でも今一つ壁を破ることが出来ず、高校の三年間も苦汁を味わった。

大学時代は卓球とも遠ざかっていたが、卒業後郷里に帰った私は、半ば遊びのつもりで、市民大会と県民大会予選に出場し立て続けに三位となった。勝ちたい勝ちたいと思った大会で負け、遊びのつもりの大会で入賞し、人生の無情を感じたが、学生時代に賞と縁の無かった私も素直に喜ぶことができた。

今紙面につれづれに思い出を記していると、白球を追う少年の日の私となつかしい友の額が浮かんで来る。その友も社会の中堅としてそれぞれに頑張っている。

スポーツで通じた友情と先輩後輩の絆は深く私の人生において貴重な六年間であった。

最後に現役卓球部員の皆さんのご健闘をくれぐれもお祈り申し上げます。



メンズファッションをトータルに品揃え
紳士服の専門店
マツヤ
株式会社マツヤ　本部/高崎市問屋町西1-11-1
TEL 0273-63-0022(代)

栗本牛乳
上毛食品工業株式会社
栗本　靖彦（第62期）
〒370　群馬県高崎市矢島町160番地
TEL 0273（53）1711(代)
FAX 0273（52）0007

ぼくらは生活探検隊
群　栄
代表取締役会長
有田　邦夫
〒370 群馬県高崎市常盤町133番地
TEL 0273(24)4315(直通)
0273(26)3390(代表)
FAX 0273(24)2971

ああ高々卓球部

中山　邦臣（75期）

卓球といえば、暗いスポーツの代名詞といわれるようになって久しいが、我々が現役の頃は「卓球ニッポン」の名残もあり、世界チャンピオンも輩出していた時代であった。

そもそもスポーツは娯楽としてとらえれば非常に楽しいものであるが、競技スポーツとしてみたならば苦痛を伴うものである。とりわけ卓球は老若男女を問わず楽しめる反面、真夏であっても戸を閉め切ったサウナのような環境で練習をし、試合となれば一日に五～六試合もこなさなければ過酷なスポーツなのだ。

こんな卓球というスポーツに青春時代を捧げた自分だが、いまになって顧みれば、大変すばらしい思い出とかけがえのない友人・仲間を与えてくれたことに感謝している。

高校生活の思い出の中で最良のものは、二年生の時に宿敵前高との定期戦において、勝利をおさめたことである。シングルスのみ九試合の形式で四対四のまま最終試合に出場した自分は、他の競技も全て終了しており、総合の勝敗も卓球部で決するため、観客が窓にしがみついて観戦するという異様な状況において勝つことができた。日頃は厳しい先輩もこのときばかりはほめてくれたのを今でも覚えているし、前橋駅まで凱旋行進した後、噴水に投げ込まれ全身びしょ濡れになったよろこび（?）は一生忘れないだろう。自慢話になってしまったが、思い出話等というものは、多かれ少なかれ自慢が入っているのではないかと思う。

現在、社会人としてまた家庭においては父親として日常を過ごしているが、それぞれ仕事の都合もありなかなか会う機会も作れないものの、高校時代の友人とは会えばみんなが十代の過去に遡って付き合えるという、かけがえのない間柄である。現役の生徒には偉そうなことは言えないが、自分の人生の中における輝いている時期をどう過ごそうかを考えて学生生活を送ってもらうことを望みたい。悔いの残らない人生なんて有りえないと思うけれど、有意義な人生は送ることはできると思うから……。

写真提供　堤　康高（71期）

軟式庭球部

高中庭球部の想い出

柳　隆雄（51期）

私が入学したのは、終戦の翌年昭和二十一年四月旧制中学としての最後であった。そして六年間も今はない壊れかけた木造の八千代橋を高下駄で通学した。現在の体育館の所にプールがあり、その南側に二面のコートがあった。勿論外周にフェンスなどなく、ポールとラインが引いてあるだけであった。丸山部長（49期）以下部員は二十名ほどだったと思う。練習開始の前に先ずランニング、観音山の石段を上り下り二回した後で今度はローラーを掛け、ラインを引いてやっとボールに触れる事が出来た。石段登りで鍛えたお陰か、六十三才の今日まで現役プレイヤーであり昨年の埼玉県大会で団体準優勝出来た。

部活では怖い先輩の引田副部長、井門氏（49期）を初め、入沢、大友、湯本、宮下（50期）の諸先輩、同級では塚越、谷口、藤巻、小黒、岸、藤川、戸塚の諸兄達がいた。

新人戦で藤巻とのチビッコペアーで大柄の相手に初めて勝ったのが嬉しかった思い出だ。

前高定期戦、西毛地区大会、マッカーサー杯、清水善造杯、青年師範対抗戦等にも出場したが、戦績は大した事はなかった。高高庭球部としては、52期の山岸・勝俣組の活躍で少しは知られるようになった。中曽根大先輩の紹介で県女のコートで親善試合をしたのも、その当時としては珍らしく、また誇らしかった。次々に楽しい事が思い出されてくるが、テニスをやっていたお陰で、これからの人生も大いに楽しめると喜んでおります。

思い出の断片

浦野　克彦（78期）

現在のテニスコート六面のうち南側三面とグランド側一面の四面は、高高創立八十周年記念事業の一環で作られたものである。二年生の時であった。それまでは、高崎郵便局の東側、現在は公園になっている「城内コート」一～二面が練習場所であり、まれに学校北西部にあった「吉野コート」一面を使用していた。だから、新コートができた時には、たっぷりボールが打てると嬉しかったことを覚えている。

不思議と練習の苦しさは記憶にない。ただ、早朝練習で、寒さにしびれる手でラケットを握り、ゴムの固くなったボールを打っていたなというくらいである。当時は火・金曜日は七時限授業で、冬場は放課後の練習ではすぐに暗くなってしまうからであった。私自身の意識は決して高いものではなかったが、このようにして練習量が増えたことは着実に実力アップに繋がっていたようだ。翌年、三年生での県総体で団体戦優勝という成績を収めた。十年ぶりとのことであった。この時に破った高崎商業が関東大会個人戦で優勝、太田高校がインターハイで全国二位となったのだから、この優勝は価値あるものであった。

またOBの方々の応援も心に残っている。当時は、なぜこんなに教師以外から文句を言われなければならないのかと不満もあったが、今から思えば、仕事をしながら毎日コートへ足を運んでくれたのだから、同じ社会人として頭の下がる思いである。しかし、優勝の時に涙してくれたOBの方の一人は、今はもういない。

このように私の軟式庭球の土台を作ってくれた母校のコートに、今は顧問として立っている。フェンス脇の松や桜も大分大きくなり、体育館の外装も様変わりしたが、生徒の元気な姿だけは昔のままだと思う。毎日の忙しさに余裕はないが、時折、夢中でボールを追っていた自分の姿を生徒に重ねている。

「キャプテン」

荒井　宏和（82期）

「念ずれば花ひらく。」という言葉を聞くと、私は今から一五年程前の高々のテニスコートを思い出します。かなり頭の足りなかった私は、先輩や仲間とよくトラブルを起こし、あげくの果てには顧問の先生に暴言は吐き、最後のインターハイ出場寸前で軟式庭球部を首になりそうになりました。本当に問題児キャプテンでありました。私が何のために高校で軟式庭球部に入ったのかと思い起こしてみました。それは、ひとりの高校教師との出会いからでした。中学生の時の県新人戦決勝戦で私達ペアは藤岡西中のペアと対戦して負けたことがあります。試合会場は高々のテニスコートでした。その高校教師は私たちの試合をずっと見ていたのです。試合に負けて放心状態になっている私に彼は笑みなら近づいてきて言いました。「荒井君、君は高々に進学してくるんだろう。軟式庭球部で俺が鍛えてやるから、あと一年中学で頑張れよ。」と。その優しいひとことが効きました。高校入学と同時に私の高々軟庭部員としての短くて長い三年間が始まったのです。その高校教師は優しい顧問かとたかをくくっていたら、大間違いでした。厳しい鬼コーチだったのです。特に生意気だった私に対しては、他の誰に対してよりも厳しかったような気がします。夏合宿の時、練習をこっそり抜け出して合宿所の冷蔵庫に隠しておいたアイスクリームを食べていたら、いきなり背後に彼が立っていて、食いかけのアイスを取り上げられ、「お前はこんなもん食ってるから動きが悪いんだ！」と一喝されたこともありました。可愛さ余って憎さ百倍。当時の私には、そう卓観できる精神的ゆとりなどなく「とにかく、この先生を見返してやるんだ。結果を出せば文句があるまいぞ。」といった心意気のおかげで頑張れたのだと思います。そして、いよいよこれから、この先生のために勝っていけると思っていた矢先、この先生は、本人の意思とは別の力で、あかぎ国体の事務局の方へ転勤となってしまったのです。私たちは当時まだ大人の世界のいろいろが理解できなかったので、ただただ、がっかりと肩を落とすばかりでした。

ところが、どっこい。この先生は、すごい置きみやげを残していってくださいました。それは、私たちの素晴らしい先輩たちでした。この先生のポリシーを継ぐ、頼もしく優しき先輩たちです。私たちの代は二年生ながら、団体戦のレギュラーに六人入っていたのですが、私たちのねばりの弱さから、どの大会も優勝候補に校名を上げながら、すべて決勝戦で負け、万年準優勝だったのです。しかし、応援合戦では一度も負けたことがありません。三年生たちは、私たち二年生にレ

祝　創立100周年
アークゴルフガーデン高崎
代表取締役　川倉　宏之
（軟式庭球部　54期）
〒370　高崎市上中居町1480-1
ゴルフはパー72
TEL 0273（52）0872

祝　創立100周年
有限会社 田口不動産
代表取締役　田口　恵一
（軟式庭球部　74期）
〒370　高崎市若松町5－8
TEL 0273（22）2492

祝　創立100周年
Sony Life ソニー生命
ソニー生命保険株式会社
山崎　和廣（軟式庭球部　68期）
石田　和久（軟式庭球部　75期）
宮下　洋之（野球部　81期）
岩丸　高明（バレーボール部　82期）

ギュラーの座を取られているにもかかわらず、どの試合でも大声をはりあげて、ピンチの時でも「荒井頑張れ。いける、いける。一本ずつ挽回しようぜ。」と励ましてくださいました。フェンスをしっかりつかんで。真剣なまなざしで。後輩たちのために。私は自分のふがいなさと、先輩たちの暖かい応援の板ばさみになって、なんだか泣けてくるような、胸の熱くなる思いで無我夢中で白い球にくらいつこうとしたことを今でもはっきりと覚えています。私達よりひと足早く高々軟庭部を巣立っていった先輩たち、そして、その先輩達を育てた、さらにその上の先輩たち、そのまた上の先輩方、脈々と受け継がれてきた高々魂、高々軟庭部の心意気というものがなかったら、そして何よりも、憎きあの若大将先生の愛情がなかったら、私達の代で、一年生大会1・2・3位同一校独占、県内団体戦4大会全優勝、県内個人戦における数回の優勝、関東大会団体戦における二度の第三位入賞、及び全国インドア選手権団体の部第三位等といった栄光を手にすることはできなかったと思います。決して私達の代の総力だけではない。先輩方からバトンリレーされてきた念いが、たまたま私達の代で花ひらいたのだと思います。

私はキャプテンとして、いつも全国優勝を仲間に呼びかけていました。部室の黒板に毎日書き続けました。そりゃ、上には上がいて強いチームはたくさんあります。しかし、一等賞になれる確率はゼロではないのだということを念い続けて三年間の軟庭部生活を完うさせていただきました。目標はついに達成できませんでしたが、燃え続けていたがゆえに先輩や仲間や先生と衝突した途中途中の場面ひとつひとつが私の貴重な宝物です。

最後に、この紙面をお借りして、過去最悪のろくでなしキャプテンから軟式庭球部同期（一番迷惑をかけた人々）へメッセージを送らせていただきます。軟式庭球部同期の諸君、最後までこの私を見捨てずに我慢してくれてありがとう。君たちのおかげで俺は本当に素晴らしい青春の一ページを飾ることができたよ。

おい田村、よく飽きずに後のプールへ球を拾いに行ってくれたね。おい武井、君のような手ごわい前衛が近くにいてくれて鍛えられたぜ。おい石井（キミ）よくまー、遠い道のりをバス乗って自転車こいで練習に来たぜよ。キミのプレーは安心して見ていられたよ。おい、マーパ（長井君）、君が練習試合の時に俺に本気でぶつけてくるアタックはど迫力だったし、敵にぶつけてくれた時は、チームのムードが最高潮だったぜ。岡ちゃん（岡田君）、君のポイントした時のスマイルは、チーム全体を明るくさわやかにしてくれました。そして、酒井よ、学校が違ってりゃ、一番手もできた男が、いつもベンチで声を出し、熱いまなざしで見つめていてくれたことで俺たちはどんなに心強かったことか。本当のキャプテンは君だったのかもしれないね。

そして丸山博先生、私のことを本気で叱ってくださって、本気で基礎をたたき込んでいただいて、ありがとうございました。最後のインターハイの団体戦初戦で鹿実の大将を4―0でやっつけたとき、私は貴方にひとこと「よく頑張ったな。荒井。でもな、次の試合ではもっと頑張るんだぞ。」と頭でもたたいてもらいたかったのに。

昭和56年度関東選抜高校軟庭大会

バスケット部

第一期黄金時代回顧

鈴木　武文（51期）

バスケットボールの県高校選手権大会は、平成八年度で49回を経たことになる。この間に高崎高校が優勝したのは合計で11回を数える。その中でも連続優勝は3回あるが、第1回大会の昭和23年からの5年間は国体出場4回（内24年度は第5位）、県高校選手権4回等々は、正に第一期黄金時代と言っても過言ではあるまい。

戦後間もなく、部長清水貞保先生、コーチ井上卯一郎氏の熱心な指導と、先輩諸氏の物心両面にわたる応援に支えられての厳しい練習の毎日は、今顧りみても充実した時代であった。我々は高崎中学で入学し、五年生という最上級生の居る時代に篭球部に入部した。

ボール磨きとフットワーク等々、随分長いこと基礎練習に明け暮れた時期があったが、結果的にはその下積みの時代が最後に報われた思いがする。バスケットボールシューズはなかなか入手できず、擦り減った靴底にゴムを張り替えて使ったり、夏休みの合宿は、教室に木製の長椅子を二つ合わせて、持参したふとんを敷いてベッドにしたり、米やジャガイモを各々持ち寄り、交替で炊事当番や風呂焚きをしたことも懐かしい。

観音山は冬季のトレーニング場であり、縦走の途中で慈眼院に寄っていただいた蒸かしたさつま芋の味も忘れられない。清水寺の石段をトレーニングの場にしたのも篭球部が最初であったと思う。（後に各部がやり出して禁止された。）

高校二年の一月末、校舎の火災の為体育館は間仕切り教室となり、屋外コートを使ったり、高崎女子高、高崎市立女子高（現高経大附属高）などの練習終了後に借用するなどの悪条件（見方を変えると好条件かも）を克服しての国体出場は感激ひとしおであった。この年、橋爪良恒先輩率いる高崎女子高も国体初出場を果たし、アベック出場と新聞で囃されたことも懐かしく思い出される。

インターハイの感動

佐藤　弘之（81期）

昭和54年4月、高崎高校に入学した私には、一つの目的があった。「高々でバスケットをすること」当時、高々は、関東大会で優勝するなど（Bブロックではあるけれど…）輝かしい実績を残していた。このチームでプレーをしてみたい、と私は強く思っていた。実は、私は、高校入試を二回経験している。一年目は、体調不良と実力不足のため、高々を不合格になった。農大二高の二次試験の話もあったが、私は高々でプレーしたいという思いを捨てきれず、中学浪人の道を選んだ。予備校に通っている間は根性が曲がることもあった。そして、二年目の受験の前に、前高からの誘いもあった。しかし、それを断って高々を受験した。

私は、幸いなことに川嶋先生に評価をいただき、一年生ながらベンチ入りすることができ、試合にも出る機会を与えられた。チームのメンバーにも恵まれ、関東大会に三度、インターハイに一度出場した。最初の関東大会では、東京の関東高校（当時、元三菱電気の山下というシューターがいた）と対戦し、敗れた。そして、三年生（キャプテン上原さん）が最後のインターハイ予選では、準決勝で桐工に敗れ、全国大会への道を逸した。二年生になった時、三年生が早々に引退すると言い出した。我々は動揺したが、川嶋先生、三年生（高他さん、横塚さん達）と話し合い、二年生が主力として頑張れということだと解釈した上で、我々でやっていこうと決めた。それからしばらくの間は、勝てなかった。練習しても勝てなかった。我々は弱いのか、と思うこともあった。そして二度目のインターハイ予選を迎えた。準々決勝の相手は、以前に惜敗した中之条高校だった。ゲームの前に「ああ、ここまでか、また中之条に負けてしまうのか」という気持ちがあった。結果は我々の圧勝だった。これまで実感できなかった「強くなっている」というのを初めて実感できたゲームだった。準決勝では太田と対戦し、10点差で負けた（この年のインターハイは太田高校が出場した）。しかし、このゲームで、我々は来年はいけるという感触をつかんだ。

それから我々の快進撃が始まった。夏の強化大会、冬の新人戦、春の総体、夏のインターハイ予選、県内の大会すべて優勝した。最後のインターハイ予選では、準決勝の伊東戦を除くすべての試合で100点ゲームを記録した。決勝戦でも中之条を相手に、後半はスタートメンバーが休む程の余裕があった。

そして、我々が最終的な目標としていたインターハイは、神奈川の川崎市で行なわれた。初戦は、静岡の浜松西で、接戦の末、競り勝つことができた。二回戦の相手は、大阪の浪商（当時、元松下器の下村というセンターがいた）と対戦した。ゲームは、浪商にリードを許す展開となり、後半残り五～六分でオールコートプレスを仕掛けたが、及ばず、69－65の4点差で敗れた。もしこのゲームに勝っていれば、次は能代工との対戦が待っていたが、我々の夢はこれで消えた。

現在、私は、高校の教員を勤めて11年になる。函びあのインターハイでの感動を求め、生徒と共に頑張っている。私を育ててくれた高校バスケットボール界に恩返しをしたいと思い、審判も頑張っている。こんな今の私があるのは、川嶋先生のご指導をはじめ、高々バスケット部のOBの方々の支え、そして、良き同級生に恵まれたこと、良き先輩、後輩に恵まれたこと、（一学年上の先輩には申し訳ない気持ちも残るが…）そして、自分

第一期黄金時代　鈴木武文

土地建物測量登記
小澤武男土地家屋調査士事務所
（57期）
〒371 前橋市大渡町一丁目20番地7
TEL 027－251－6084

総合食品卸問屋
株式会社 平野屋
代表取締役 須田 修巨（66期）
〒370 高崎市問屋町2丁目10番地10
TEL 0273－62－4048

外科・胃腸科
中島クリニック
院長/医学博士 中島 透（73期）
NAKAJIMA TOHRU
〒370 群馬県高崎市末広町85－1
Phone 0273-23-2077

自身の中学浪人の経験や、バスケットから学んだものが生きているからこそと考える。

最後に、我らの高々バスケット部のさらなる発展と、OBの方々のご健勝を祈念して、私の青春の一ページを閉じたいと思います。

「ディフェンスから！」

古賀　直樹（96期）

高崎高校バスケットボール部に入部して私はチーム全体のディフェンスに対する姿勢に高々らしさを感じた。

バスケットボールでは、能力の高い選手が活躍して得点する。しかし、ディフェンスとなると地道な足腰の鍛練やひた向きな気持ち、そしてチームワークがとても重要となる。立見賢治先生はその重要性を指導して下さり、チームにそれが浸透し、一貫した姿勢でバスケットボールに取り組んでいた。特に先輩が引退し、私が主将となった代は、オフェンスの能力も高くなく、身長も低いチームだったために、ディフェンスに対する姿勢はより大切になった。

守り勝つための練習はとても厳しく、常に自分との戦いであったが、それだけに練習中は皆で志気を高めるための声を出しあい、悪い所を指摘しあい、励ましあった。

また県外への遠征も数多く、全国の強豪と戦うときも高々のバスケットができるよう

「ディフェンスから。」

と声をかけあい、試合に挑んだ。

新チームになったのが早かったということもあり、県新人戦では12年振りの優勝を果たすことができた。県高校総体、決勝では受け身になってしまったところ樹徳高校に攻められ、一時18点ものリードを許してしまったが、ディフェンスからの高々のバスケットを取り戻し逆転勝ちした。

そしてインターハイ県予選、三年生にとっては最後の大会であり、ここで優勝することを目標としてきた。何とか決勝まで勝ち進み相手は新人戦・総体と同様樹徳高校。相手の高いオフェンス能力を止められず前半リードされた。後半を前に

「ディフェンスから」

そう皆で励ましあった。そしてチームの絆が二度目の逆転勝利を導いた。

バレーボール部

高々バレーボール部の思い出

掛川　秀雄（48期）

翠巒体育会より原稿依頼を受け何を書いたらよいか色々迷って居た時、平成九年四月二十五日付の上毛新聞「高高一世紀物語」に我がバレーボール部の創部当時の写真が掲載され、驚くと同時に懐かしくもあった。（写真(A)小生後列左より二人目）この写真は昭和二十二年（一九四七年）のユニホームマークが高崎中学時代のもので昭和十二年の美術部の新設記念に制定され「鷹」に「中」のマークを使ったものであると云う。この写真により改めて創部五十年である事を認識した。

バレーボールは当時云うまでもなく九人制であり屋外での競技だった。風の影響がその勝敗を大きく左右した。キル（スパイク）を打つトスが風に流され相手のトスとなってしまう事や、サーブのトスは風を考えてあげるとか悩まされたものである。又終戦後二年と云う事でボール等の物資が不足しなかなか購入出来なく大事に大事に使ったものである。ボールは中にゴムのチューブがあり、外側は革をはぎ合せてあるもので良くパンクをしたり、はぎ合せの糸が切れてチューブが飛び出したりして各人が家に持ち帰り修理して使ったものである。或る時は練習用のボールが少ないのでサッカー部で使用不能になったボールを貰い修理し、サーブ練習をした事もあった。靴なども無く練習時は跣で靴は試合の時のみ履き、その時はジャンプが少し高く飛べる様な気がしたものである。技術面で云うと、我々が初代であり監督も含め、男子バレーボールがどの様なものか皆目わからず、大会に出ては、チームのホームメーション、アタックの方法等を見て自分達で覚え研究したものである。当時女子バレーでは県下最強であった富岡女子校に、今ではとても考えられないが練習試合に行き一セットも取れなかった苦い思い出もある。その後練習と研究の成果が出て昭和二十三年に学制改革により、高崎高等学校となり、ユニホームのマークも変り国体予選では決勝まで進む事が出来、高崎商業高校と接戦の末負け国体に出場出来なかったくやしい思い出もある。写真(B)はその後、県選手権大会で、優勝し、高崎商業高校校庭（今の県合同庁舎）で写したものである。

中列左から三人目監督の金井先生、前列中央桜井俊夫君、その右隣高橋三郎君、中列一番左織茂広昭君、後列一番右新井忠三君、この五名の方々が残念ながら他界してしまった。改めて心より冥福を祈るものである。

（写真A）

（写真B）

ちなみに小生は前列左より二人目で、これより五十年を経過し、今では高崎市バレーボール協会副会長の立場でバレーボールにかかわって居るが、息子二人、掛川徹（79期）、掛川稔（82期）、も同じ高々バレーボール部で汗を流した事を思うと感慨深いものである。尚写真(A)の後列一番右は現在、高崎市バレーボール協会長及び、高崎市体育協会副会長、広岡敏彦氏の若かりし頃の姿である。

高々バレーボール部及翠巒体育会の益々の発展を祈念して筆を置く。

感動を手にして

菊地　俊哉（78期）

十九年前の三月、私は父が監督をする高々バレー部の一員として、東京体育館のコートに立ちました。父子共に全国大会出場するということが珍しかったので、父子鷹として注目をあびました。ベスト8をかけ戦った藤沢商業戦では、コートが固く、ライトがやけにまぶしく、天囲が異常に高かったことが心に焼き付いています。結果は惜敗、でも全国ベスト16は、自分にとっても大切な勲章となり、また現在までの自分の生き方に勇気を与えてくれています。

毎日の練習、父が監督というのは、さすがに厳しいものでした。しかし、父はもっと厳しかったかもしれません。でも他の人があまり経験できない親子の生活ができたと思っています。

高々のバレー部は、中学時代の実績が素晴しいメンバーがそろい、前年度、あと一歩のところで全国大会へのキップを取りそこなっていました。非常に個性が強く、誰れもがリーダーシップをとれる能力があり、それが逆にまとまりを欠くという弱点にもつながっていました。

県予選が始まり、チームにも徐々にまとまりがでてきました。特にそれを感じたのは四強リーグの高商戦でした。絶対負けられない首の皮一枚状態から爆発的な強さで逆転し、北関東大会へ駒を進めました。高々のメンバーが仲間で本当に良かったと痛感し、団結力に感謝しました。

北関東大会の決勝で対戦したのは、またもや高商でした。高商は叔父が監督をしていたので、監督・選手とも身内の戦いとなりました。多くの高々生が応援にかけつけてくれ、その中での勝利、翠巒の合唱と胴上げは、感動という財産として心に刻み込まれています。

現在私は、高校の教諭となり、バレーの指導者として子供達に感動を味わってほしいと願いつつ共に汗を流しています。勝負の世界には、そこまで登ぼりつめた者にしか味わうことができない感動があり、それをつかんでほしいからです。

代々木のオレンジのコートに立ち、感動を手にしてほしい。そこには未知の世界が広がっているのだから…。

OB会活動報告

岩丸　高明（82期）

平成8年度バレーボール部OB会の活動は、新会長菊地俊二氏（52期）を迎え一年目の年度でありました。

2月に行なわれました時総会では、会員30余名の出席のもとに、今後の活動テーマである組織の活性化について、いろいろと議論を出し合い検討しました。

現在は年一回の定時総会のみ行なわれていますが、本格的な組織化をしてまだ数年しかたっておらず、会員に活動の主旨が未だ浸透していないのが実情であるようです。今後京浜地区の会員の呼びかけ、また期別幹事の活動の徹底によって、より多くの会員の参加を募り、ゴルフコンペや現役との交流試合等、いろいろな行事にも挑戦していくことをOB会の方向性と致しました。

もう一つOBの活動として報告致しますと、昨年度群馬県6人制バレーボールクラブカップ10連覇の偉業を為し遂げた翠巒クラブは、もう一つ記録をのばし、V11を達成致しました。10年目の山を越え、また今年も価値ある一勝をあげました。相手は名門桐生商業の20才前後のOBをメンバーとするサンコー電子という会社のチームで、「桐商バレーに負けたくない」「若さに負けたくない」「クラブ

WOODY LIFE
須賀木工ショールーム
バレーボール部OB
須賀　英夫（75期）
〒370 高崎市新保町1067
☎0273-63-4781

高橋税理士事務所
バレーボール部OB
税理士　高橋　浩生（78期）
事務所　高崎市大八木町3002番地10
〒370　TEL 0273-63-6303
FAX 0273-63-6302

掛川司法書士事務所
バレーボール部OB
司法書士　掛川　稔（82期）
事務所　高崎市東町28 コーポラス高崎2F
〒370 TEL 0273-24-7552
FAX 0273-28-4747

チームの意地」そんな気持ちが平均年齢35才の選手のエネルギーとなり、終ってみれば2—0のストレート勝ちで覇権を守りました。

その後の大会でもサンコーを破り国体関東予選にも出場しました。関東では、富士フィルムプラネッツ（Vリーグ）と戦い、高さの違いを見せつけられ善戦むなしく破れましたが、普通では経験できない大舞台で翠巒バレーを世にアピールでき、メンバー全員が満足したことと思います。

今後もOB活動に積極的に参加し楽しいニュースが報告できるよう頑張りたいと思う。

ラグビー部

国体出場ならず

吉田　賢二（69期）

我々の頃でも、まだラグビー部隆盛期の毎日毎日の厳しい練習の蓄積、輝かしい記録、先輩達の自信と誇りが、熱い息吹きとして残っているかのようで、それを受け継ぎもした。我々の練習を見て、県下他校の監督が部員に「よく見てろ、ああいうふうにやるんだ」と言っているのが聞こえてきたこともある。

練習方法、技術面は、なお高い水準を維持していたと思われる。しかし、悔しいかな、いざ試合になるとその差も大したものでなくなり、部員不足からくる弱体化を補い切れなかったりで、接戦のうえ辛勝、あるいは群馬県で勝っても県外では勝てなくなってしまっていた。

昭和39年、我々が三年生の年も、県予選を勝ち抜き、あと一勝、宇都宮工業に勝てば新潟国体出場というところまできていた。

私は、不運にも、県最終戦で、右肩を脱臼してしまい、完治しないまま試合に臨んだ。試合直前、応援に駆けつけてくれた先輩の一人に呼ばれ、「相手のスタンドオフは、動きがもたついている。スクラムサイドを抜かれてもいいから思い切ってタックルに行け」とアドバイスを受けた。私のポジションはいわばタックルだけが仕事の右フランカーだった。ようし、私は唇を噛んだ。試合開始後間もなく、相手方ボールのスクラムとなり、そのチャンスが訪れた。

ここだ。事の成否は問題でなかった。迷いも躊躇もなかった。ただやってやるだけだった。ボールがスクラムから出て、ハーフが手にするや否や、スタンドオフめがけて前傾姿勢で飛び出した。彼は倒れ、ボールが前に転がった。だが次の瞬間、右肩に激痛が走り、肩から痺れが全身に拡がり、もはや試合の展開についていけなくなってしまった。よりによって大事な一戦で、全くもって役立たずだった。結局、我々も国体出場ならず、全国大会出場ならずで終ってしまった。

その後当時の仲間と飲んだ時など、しばしば「あの時勝っていれば俺達だって群馬県代表の国体選手だったのに」という話になった。それから五年経ち、さらに十年経ち、二十年経った頃、さすがに「あの時、勝っていれば……」という話は消えた。

昭和58年10月、あかぎ国体が開始された。私はたまたま高崎駅で国体出場の選手団に出逢った。胸を張り、自信に満ちた足取りで通り過ぎていく。口を堅くきり結んだ者がいる。ここ一番とほぞを固めている者がいる。試合に渾身の力でいどもうと真剣な眼差しの者がいる。いやがうえでも高鳴る鼓動を押えようと拳を握る者がいる。覇気満々の一団が乗降客の間を通って会場へ向かう。ユニフォームの胸に印された県の文字が大きく輝いて映る。頑張れ。私は通路の端から声援を送った。

今だってそんな一団とすれ違えば、やはり格別な懐しさとともに幾つかの光景が甦えり、そして若干の苦さを覚えつつ、同じように声援を送るだろう。

ラグビー部の想い出

須永　信夫（74期）

私の学生時代で、まず思い浮かぶのは、やはり高校時代の三年間です。この三年間は私の人生の中でも最も充実していた時代の一つです。

私がラグビー部に入部したのは、一年生の秋でした。その日の練習は一年生対二年生で八人制の練習マッチでした。一年が一人足りなかったので、いきなりフルバックで試合に出場するはめになってしまいました。相手の二年生は、後に慶応大学の監督になった黒沢さんや、県内の他校の選手に恐れられていた大山さんなど、県内負けなしの壮々たるメンバーでした。

試合が始まると、何がなんだかわからないうちに一方的に攻め込まれ、私は無我夢中でタックルに没頭していました。この初体験の練習マッチで、大山さんらをタックルで倒したときからラグビーというスポーツの魅力にとりつかれました。

日本マスチック工業株式会社
代表取締役　木村　洋
〒370　高崎市中居町四—四—一
TEL〇二七三—五三—三五五一
FAX〇二七三—五三—三五八三

須永建設株式会社
須永　隆（72期）
須永　信夫（74期）
〒370-12　高崎市倉賀野町五二
TEL〇二七三(四六)二一六五

試合は負けましたが、接戦だったと思います。試合後、スリキズだらけの大山さんが、「おい須永、本気でタックルするなよ。」と言ったのが、とても私は、うれしかった思い出です。その後の私のラグビー人生は、タックルとハンドオフに魅了されました。

高校時代の三年間、秋の県大会は、すべて優勝、県内では輝かしい成績を残したが、県外の壁は厚く、あこがれの花園への出場はできませんでした。ただ、悔やまれるのは私が三年生の時、前高に負けたことです。春の国体予選の県大会で決勝で敗れ、秋の定期戦でも接戦だったが、試合終了寸前に逆転された思い出があります。

ラグビーシーズンは、秋から冬なので三年のときは、全国大会予選を勝ち進む度に親から「早く負ければ受験勉強も出来るのに。」といやみもいわれました。しかし県大会決勝で太田高校に勝った時は、高々ラグビーの伝統を守れて、自分なりにラグビーを続けてよかったと自負しました。結局、出場決定戦で熊谷工業に大差で敗れ、高校でのラグビーは終了し、受験勉強に専念したのは、年が明けて正月からでした。二月には大学受験が始まるので、私が真剣に勉強したのは昭和五〇年の正月だけでしたが、この一か月間は本当に勉強に集中でき、自分なりによくやったと思いました。この一月間のおかげでラグビーの強い明治大学に入学することができました。

まだまだ榛名湖畔での夏合宿他、高校時代はラグビーの思い出でいっぱいです。

サッカー部

サッカーを生涯の友に

池内　嵩（53期）

昨年は、愛知県で開催された第三回スーパー・エイジ・サッカー大会、そして北海道、日高町での第二五回記念関東四十雀サッカー大会（六十歳以上）に本県選手の一員として参加しました。

休日は、県内の少年、女子チームを練習相手に試合をして、サッカーを生活のなかに「遊び」として取り入れ、還暦を過ぎた多くの県内各地の仲間と交流を深めながら楽しい生活を送っています。

この、サッカーの原点が高崎高校から始まりました。当時は県内では、館林高校が強く悔しい思いをしました。そんな高校時代の思い出の試合の一つに、雨中の明治神宮絵画館前グランドでの東日本サッカー大会への出場でした。

学生、社会人の現役の頃は、国体を目指して勝つことに集中した「厳しいサッカー」を体験して、指導者になってからは、子供達にフェアプレーの精神と勝つ喜びを教えるサッカーでした。

「人生八十年時代」を迎え、近年、余暇時間の有効活用や豊かなゆとりある日々を送る健康管理の観点から、スポーツの果たす役割が叫ばれ「生涯スポーツ」の重要性が再認識されています。

本県でも、壮年、高齢者が四十雀サッカーで爽やかな汗を流し相互の親睦を図りながらサッカーを楽しむ人口が急速に増大していることは、誠に喜ばしいことです。

私に、このサッカーの面白さと厳しさを教えてくれた、高校での指導者、またその時々の先生方に感謝すると共に、趣味として「遊び」として生活のなかに位置付け、サッカーを「生涯の友」として多くの仲間と往年のプレーを追い掛け、「生涯現役」を続けていきたいと思っています。

高高百年、サッカー部五十年 OB歴ん十年

大久保滋郎（63期）

この題を書いてから気が付いた、ナゼ始めの約五十年間はサッカー部が無かったのか、明治の頃から既に蹴球は行われていた筈なのに、サッカー不毛の地で戦後間もなく、何も無い時期にサッカー等始めた奴は相当な物好きだったんだなあと改めて感心、敬意。

高高卒業以来酔乱の日々を三十余年、突然の原稿依頼、はてさて何を書こうか夜は睡乱、昼は混乱てな訳だが、我々が

祝　高崎高校創立１００周年

高崎高校サッカー部も創部50年を迎えました。
現役サッカー部の活躍と全国大会出場を期して応援します。
（国民体育大会１回・全国高校総体１回・全国高校選手権１回）
翠巒サッカークラブ（群馬県社会人２部リーグ）およびミドル翠巒サッカークラブの益々の興隆を期待します。

高崎高校サッカー部ＯＢ会　会長　　阿久澤　茂（69期）

浜川競技場にて

高高在学中云々の懐古談的過ぎ去りし青春の絆、等とは心も身も青春現在続行形のつもりの私にとってはちょいとつらい。でも仕方無いか。

サッカー部は五十年、齢は五十をチョイと越したと云う事は、在校中は部の歴史のかなり前の方に位置し、私はもうサッカー部OBの中では化石的存在になりつつ有るかと、だが現実には今の処現役のサッカープレーヤー。若いOBから迷惑がられ、ゲーム中の罵声の如き叱咤を受けようとも、それを励ましと理解し、まだまだまーだ続けよーっと。何でいい年こいてサッカー等まだしているのと言われれば好きだからと言うしか無いもーん。　今でこそ生涯教育、生涯スポーツとか健康の為、成人病予防等々の語が一般的になり、朝や夕にジョギングする中年の人達の姿も風景の一部となったが、私が高々を卒業した六十四年三月、社会にはまだまだそんな意識は薄かった。高校大学卒業後の社会人にとり、スポーツと言ってはみても、個人鍛練的運動の色彩が濃く、生活の中のゆとりを楽しむ迄に至らず、ましてチームスポーツではまだまだの時代であった。サッカーでは言わずもがな。

でも当時から趣味のスポーツ、楽しむスポーツがあっても良いのではないかと云う意識は漠然としていたが有ったように思える。今はその気さえ有れば楽しめる時代。

体育や運動と云う言葉とスポーツは全く意味が違うのだから。Sportive過ぎたかな。

ミドルすいらん　(77.2.2. 対 前高OB戦)

翠巒クラブ

田中　康二（86期）

翠巒クラブは、昨年の群馬県社会人サッカーの二部リーグでは、五勝三敗三分となり、Aブロック四位に終わりました。今年こそ一部復帰をと、頑張っています。

現在の活動は、週一回のナイター練習と、年に三回の大会（天皇杯、リーグ、群馬総合）に参加しています。主にリーグに重点をおいておりますが、最近では、若手のチームが増え、手のぬけない試合ばかりとなっています。高校のOBチームで、上位リーグに所属しているのは、前商OB（図南クラブ）、育英OB（レイティーカース）の一部所属についで、高々は三番目といえるでしょう。しかしながら、サッカー人口増加の波におされ、高々OBだけではチーム力維持が非常に厳しい状況にあり、現在では高々の枠を問わず、いろいろな選手に出場してもらっています。みなさんのお知り合いで、サッカー経験者がいらっしゃるのであれば、ぜひとも、田中か監督の高橋義昭（74期）まで、ご紹介して下さい。

私たちのクラブの良点は、選手一人一人の個性を尊重しながらチームをつくり上げていける所にあります。群馬在住を問わず、関東地方内であれば、どなたでもOK。どんどん声をかけて下さい。特に二十歳代の若手を。

柔道部

全国大会出場の思い出

櫻井　弘（56期）

「名監督　今井孝造先生」

昭和三十年七月十日、インターハイ出場をかけた群馬県高校柔道選手権大会は、前橋高校体育館で四十チームが参加して開かれた。

秋の新人戦、春の関東予選ともに第三位に甘んじていた我が高崎高は、主将の沼賀勝平さんを中心に猛練習を重ね密かに優勝を狙っていた。結果は、準々決勝で桐生高を、準決勝で伊勢崎高を、決勝で勢多農高をそれぞれ撃破し優勝した。

なかでも、圧巻は準決勝だった。強豪伊勢崎高とは、それまで勝ったことがなかった。この日も、二勝二敗一引き分けで代表戦になった。これには、両校にとっても番狂わせがあったのである。伊勢崎高には、県下にその名を轟かせていた大河選手がいた。その大河選手を佐藤岳男君が破ってしまったのである。ところが、高々のポイントゲッターの一人田村

▲岸　沼賀　桜井　峯村　佐藤　今井先生　田村　生方

◀沼賀主将

悟さんが負けてしまったのである。

当然、伊勢崎高の代表選手は大河選手である。誰がみても大河選手なのだ。そこで、我が高高は、本戦で大河選手に勝った佐藤君だと、誰しも考えた。

ところが、監督の今井孝造先生は、本戦で負けて泣いて悔しがっていた田村さんを指名したのである。

その時、選手の誰しもが『今井先生は、何を考えているんだ』と思った。だが、その心配はすぐに消しとんだのである。田村さんが強豪大河選手を見事な内股で一本勝ち。今井先生の見事なまでの采配だった。その勢いに乗って決勝戦も完勝し大分市で開催のインターに出場を決めたのである。

以下、その時のメンバーを紹介する。

（数字は学年）

3 沼賀勝平　『立ってよし寝てよしの試合巧者、寝わざは県一。（現在もか？）』

3 田村　悟　『がっちりタイプで左右の内股の切れは群を抜いていた。練習嫌いも有名』

3 峯村義雄　『長身からの大外刈りが得意。』

2 生方将夫　『右の背負投げは天下一品。二度の前腕骨骨折を克服。母校愛に燃えていた』

2 佐藤岳男　『左の跳腰で群馬県チャンピオンになる。』

2 櫻井　弘　『僚友、佐藤君の跳腰を投げられながら習得、得意技にした。』

1 岸　泰徳　『左の変形からの大外刈りで一年生でレギュラーに。』

ささやかな「異変」

関口　茂樹（63期）

ここ数年のことですが、後輩諸君の「文武両道」ぶりが、OB会でちょっとした話題となっています。

彼らは厳しい稽古にもよく耐えて、最近では関東大会出場を不動のものとし、個人戦でも健闘し、好成績を上げています。特筆すべきは柔道同様、学業に於ても粘り強く努力し、難しい入試を突破していることです。

私達の頃には間違っても柔道部から現役で東大に合格したり、理数系の国公立大に大挙して合格するようなことはありませんでした。このことは正に「異変」です。

先日、多摩大学学長グレゴリー・クラーク先生の講演を聴きました。「日本の学生は精神力が弱く、欧米の学生にはとても及びません。運動部の学生を見れば明らかで、彼らはただ運動するだけです。練習の後は、酒を飲むか遊ぶかのどちらかで、そして寝るだけ。欧米のスポーツ選手は練習の後でもしっかり勉強します。学生ですから当然です。どうしてこのように違うのでしょうか。」

外交官、ジャーナリストそして学者としても活躍し、日本に於ては上智大学でも教鞭を執るなど、滞在すること二十五年。日本社会を鋭く分析して定評のあるクラーク先生の指摘は説得力があり、運動に明け暮れ、身に覚えのある小生には

祝　高崎高校創立100周年

柔道部ＯＢ一同

ＯＢ会長　関　口　茂　樹（63期）

耳の痛い話でした。

欧米の一流選手の中には競技生活後、科学者などの知的職業に就く人も決して珍しくないことを考えると、クラーク説は誇張とは思えません。

人、モノ、資本、情報が自由に行き交う地球的規模の大競争時代が始まった今、肉体的にも精神的にも強靱な若者が大勢輩出し、このクラーク発言に堂々と異議を唱えて欲しいものです。

高崎の地に、後輩諸君のささやかな「異変」が起きていることを知るならば、クラーク先生は果して何んと言うでありましょうか。

高々柔道との出会い

鳥居　吉二（73期）

現在、私は前橋商業高校の柔道部の監督として、生徒に柔道を説き、毎日その練習ぶりを激励しているが、今、自らの高校時代を振り返ってみるとき、自分がいま関わっている生徒（部員）と、当時の自らの姿がオーバーラップし、限り無いなつかしさとともに回想の念にかられる。

当時の社会的背景として、代表的な出来事は大久保事件と浅間山荘事件であった。特に、浅間山荘事件では、事が解決に向かい新展開してゆく様を、当日たまたま校長室の掃除当番にあたっていた当時の自分達が、校長先生がテレビに見入っているわきから、見るとはなしに目にとびこんできた場面があったことがなぜかしら頭に浮かんでくる。

高々柔道との初めての出会いは、中学二年のときの吉井町武道館で行われた昇段試合の会場においてであった。私は初段を受けにそこへ行ったのであるが、同じくその会場に大変大人びた高校生二人が黒帯をしめて、二段の昇段戦を受けにきていたのであった。胸には今と変わらぬ高々のマークが入っており、聴くとは無しに聞こえたその会話や、また風貌が、田舎者の私にとって、えらく中味の濃い話しに聞こえ、都会風に輝いてみえた。二段戦の試合など見る機会も初めてであり、興味深く見入っていたことを覚えている。そこで使われた技も当時の私にはなんとも垢抜けてみえた。私には柔道の強さにおいても、人格的にも遠く及ばぬ人達のように思えた。

後に師となる今井孝造先生との初めての出会いは、同じく昇段試合の場面においてであった。先の高々柔道部員との初めての出会いからさらにさかのぼること一年前の中学一年の終わり頃であった。試合の終えた我々をつかまえて、その試合内容の未熟さを見兼ねて「寝技は、足が使えるようにならなければ強くならない」というようなことを実演まじりで説明していただいたのを覚えている。寝技で足を使うということがあまりに新しいことであったので非常に印象深く感じた。ただ、このときには一中学生にとって今井先生が高々の柔道の先生であることは知る由もなかった。

こんな小体験を経て、二年後甘楽の谷から高々の柔道部に入ってみると、そこにかつて助言をいただいた今井先生が監督としていらっしゃった。夏の強化合宿では多くの先輩方がむねを貸しにきてくれた。そのなかに、かつて吉井町武道館でその姿を見た二人の先輩もおられた。そして今度は直接の後輩として声かけてもらえる状況になったのであった。

自分なりに抱いていた「本物の柔道」ができるという喜びにひたり、胸おどらせて稽古に励んだ日々が昨日のごとくよみがえってくる。

（群馬県立前橋商業高校柔道部　監督）

剣道部

出会い

小林桂一郎（53期）

卒業して四十三年、自分では元気の積もりでも心身共に下り坂にある。高々時代の思い出の中に不思議に勉強の事が出て来ない。出て来るのは剣道の事ばかりである。

昭和二十七年春、早大出の偉く元気の良い英語教師が赴任した。網中先生だった（元高崎市教育長、現県央高校校長）。自己紹介で早大剣道部の事、六大学戦での活躍の話があった。授業後、廊下で先生に中学二年より剣道を始め、初段であること、是非胸を貸して欲しい旨申し出た折り、「よし、やろう」ということで、翌日より防具を持参し、旧講堂にて二人だけの練習が始まった。毎日放課後の練習に、異様な気合いと竹刀の音に見物人が段々増えてきて、確か二週間後には七、八人の生徒から剣道を習っている、やってみたい、との申し出があり、自然に同好会が発足した記憶がある。

戦後、GHQより、剣道は公式には禁止されていたが、昔から剣道の盛んな群馬では各地で同好の士が集まり練習していた。高崎では公園内の武徳殿で週三回練習会が開かれていた。練士以上の先生が二十人位で、生徒は五人位で、大事に大事に丁寧にご指導預かったので、つらい思い出は全然ない。公式試合の無い代わりに各地で村役場、小学校落成記念の剣道の野試合があり、休日には防具を担いで吾妻や児玉の方迄出掛けた記憶があ

第43回　関東高等学校柔道大会
（平成7年6月・群馬県スポーツセンター）

る。朝、木刀の素振り、学校、武徳殿の練習、夜、素振りと剣道に明け暮れた日々であった。網中先生は先生というより兄貴の様な存在で、本当にお世話になった。

翌二十八年、禁止令が解除となり、新入生で横田、笠井、柳沢等、優秀な新人が加入し十五、六名となり、自分も二段となった。網中先生のご努力、田中校長、諸先生のご理解ご協力のお陰で、同好会が念願である剣道部に昇格した。猛烈な練習を行い、後輩を随分泣かせた事もあったが、自分が卒業後、県大会で優勝したり、結果が出たことは本当に嬉しかった。

先生との出会いから戦後の復活剣道部再建に参加し、主将として卒業した事は自分の人生に於いて大変な意義を持ち、社会人になって常に、リーダーシップを取る人間になれたのも、その影響は大きいと思っている。剣友会が横田会長、幹事諸公のご努力のお陰で、四十年近くも継続し、益々盛会になっている事はなかなか出来ない事で、心から感謝して居ります。

新しい剣道場

伊藤　尚毅（84期）

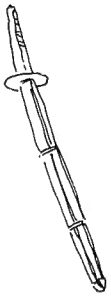
私が高高に入学した昭和五十七年当時は、近年取り壊された旧講堂を剣道場として使っていた。そこには、多くの賞状とともに、歴代OBの方々の写真が並んでいた。旧講堂に入ると、自然と身が引き締まり、高高剣道部の伝統を肌で感じたことを記憶している。

しかし、昭和五十八年に第2体育館ができると、剣道場はその1階に移されることになった。これに我々剣道部員は猛反対し、当時の顧問だった上野先生をずいぶん困らせた。反対した理由は、旧講堂の方が広く、道場の形も現剣道場より練習がやりやすかったこと、そして何より伝統を感じさせる雰囲気が好きだったからである。しかし、第2体育館は、1階は柔道場・剣道場として使うという前提のもとに建設されたということで、我々の思いは届かず、敢えなく引っ越しをするはめとなった。

新しい剣道場に移ってしばらくは、慣れない場所での練習に戸惑い、やりにくさを感じたが、時間の経過とともにそれは薄れていった。

当時の剣道部の成績だが、私が部長をしていた五十八・五十九年度は、ベスト4の壁をどうしても破れず、ベスト8に留まっていた。樋口先生、上野先生、OBの方々に指導を仰ぎながら、部員28名が一丸となって練習に励んだが、あと一人勝てば、あと一本取ればというところで入賞を逃していた。卒業してしばらくは、仲間と当時の話をすると、どうしてあの時勝てなかったんだという悔しい思いがしたが、今では懐しい思い出となっている。

その後、新剣道場はOB会より寄贈された部旗が掛けられるなど、徐々に整備され現在にいたっている。使い始めて十二年経つと、我々が移ってきた頃の違和感は感じられず、そこが剣道場として当たり前となり、現役部員が高高剣道部の歴史を重ねている。



祝　高崎高校創立百周年

高々剣道部ＯＢ会

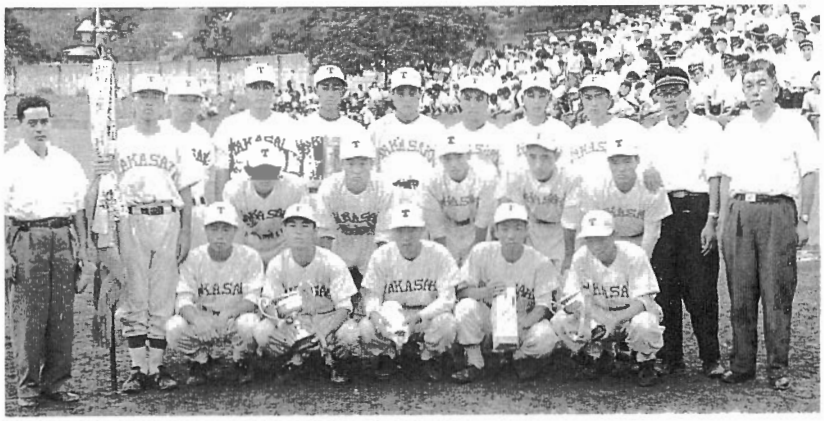
剣　友　会

野球部（硬式野球部）

信頼

若山　亨（58期）

第三十九回全国高校野球選手権北関東大会は昭和三十二年七月二十日茨城県営球場で茨城、栃木、群馬の三県代表八チームが参加し大会の幕をあけた。高々は群馬大会を準決勝桐生高、決勝富岡高と破り優勝、本大会に乗り込んだ。第一回戦は当日優勝候補で地元の雄水戸一高と対戦7―0で一蹴。私は二年生控え投手でベンチ入りしていた。エース細谷さんは東日本随一といわれた好投手で県大会は1人で投げきりこの試合もヒット二本で0封。私の登板のチャンスは皆無と思われた。翌日の準決勝宇都宮商戦の三回細谷さんが出塁の際三塁を狙って足首を負傷、四回は登板したが痛みがひどく後を私がリリーフし四回に田島さんの一打で得た一点を守り1―0で辛勝した。予想もしなかった登板に無我夢中であった。決勝戦は土浦一高。しかし細谷さんは無念の欠場、私が先発後は継投と作戦が決った。初回に一点を先取、私は出塁を許しながらも0で押え四回マウンドへ向ったら突如の投手交代、残念ながらベンチに下った。七回に一挙6点をとられ逆転され又も甲子園出場を逸した。翌日の新聞は細谷さんの欠場を惜しむと同時に「投手交代の失敗」、「無用の投手交代」との戦評がほとんどであった。私も交代は納得がいかず以後首脳陣に対しわだかまりを持った。



昭和三十五年秋東京六大学野球リーグ戦は早大の優勝であった　早慶戦は早大の二勝一敗で早慶両校が同率首位の決定戦となり三試合目にして早大が勝ちを制し決着がついた　史上有名な早慶に六連戦である　私は三十四年に早大野球部に入部し二年生、神宮球場ネット裏の部員席での観戦であった　この六試合のうち早大安藤元博投手は連投で五試合に完投した　壮絶な闘いでの勝因はベンチの「信頼」であった　首脳陣もナインもが安藤投手を「信頼」し連投が当然であるかの如くマウンドに送った　私は三年前の北関東大会の場面が目に浮んだ。あの降板は当然であったのだ。何故なら私には「信頼」がなかった　日頃の努力が足りなかった　私が周囲の信頼を得ていれば続投であった筈である　チームプレーの基本「信頼」で成り立ち結ばれていることを痛感した　若き日の苦い思い出である

祝　高崎高校創立100周年

高崎高校野球部ＯＢ会一同

会長　川鍋　順一　(52期)

応援部

創部から四十七年

下田　茂夫（50期）

私が二年生であった昭和二十四年夏の高校野球県大会と北関東大会は、前橋の知事公舎近くの公園球場で実施され、私は毎日のように応援に通った。この年のチームは大変に強かった事と応援席には、福田正一先輩（四六回生）が来ていて、早稲田大学流のリードをしてくれて、組織的な応援が出来た事が楽しかったという理由からである。然し、あと一歩という所で甲子園への夢は破れてしまった。

翌昭和二十五年、私が三年生のある日、前高との定期戦を前にして、エール交換の練習をするという事で全員控所に集合したが、どうも上手く出来ない。「それじゃ、俺がやってみるか」とつい前に出て行ってしまったのが応援とのつながりの始まりである。定期戦はどうにかお茶をにごして終ったが、夏の野球大会には、もっと組織だった応援をするために、応援部をつくり、福田先輩に指導して貰う事になった。

福田先輩の指導された内容で、「応援部員は普段は目立つな、必要な時だけお前達が出て統率を取りなさい」という事だけは、今も頭の中に残っている。また、テクニックについては、なかなか難しく、全員が完全に身につけたかという疑問である。

この年の野球大会は、一回戦の相手が前高であったので、いやがうえにも燃え上がり、当日は県内唯一のブラスバンドにも参加してもらい、多くの在校生が応援にかけつけ、私は学生服でリードを取ったが、当時としては最高の応援が出来たと思っている。結果は四対一で負けてしまい、相撲場でアイスキャンデー一本をなめて解散した。その後は、バレー・バスケ・ラグビー部などの応援や高崎駅の壮行会などに参加した。

発足当初の応援部は生徒会に属していたが、これは予算ゼロという事と、学校としては逸脱した行動のないように指導監督するという意図があったのではないかと思われる。これは後年になって気がついた事である。

昭和三十年代の応援部は新聞部室に同居していた関係で両方をやったという人達が多い。独立した部室がもらえたのが何年頃なのか知らないが、部発足からすでに四十七年が経過している。私でさえも、一度は甲子園で応援のリーダーをやりたいと夢見たのだから、各年次の後輩諸君も同じ夢を見ていたと思いますが、昭和五十六年選抜大会に野球部が出場し、八十一期の藤井正弘君達が、初めて甲子園のスタンドに足蹟を留めた。創部以来三十一年たっていた。長い長い夢の実現でした。

半世紀近くたつ間には、校歌が出来たり、リードの仕方も工夫されたり、変化したりで新年同窓会の時に感じるのだが、古い卒業生と新しい卒業生の間で、エールのリズムが少し違って来ているなという事である。どちらがどうという私見は述べないが、現役の人達の今後の研究課題の一つにしてもらいたいものである。

応援部＆新聞部

松田　典也（60期）

昭和三十三年入学。当時の応援部は、新聞部抜きでは語れない。

応援が好きだった訳ではない。美術部を都合でやめ宙ブラリンのところ、友に誘われた。応援部というと強面の先輩がいてシゴかれるのではと心配したが、一ヶ月考えて一年生の七月に入部した。

当時の応援部は、部室を持っていなかった。新聞部室の片隅に置いてもらっていた、入部したその日に、新聞部にも入った。新聞作りを目指した者も多くは応援部にも籍を置いた。

新聞部の先輩達は、先輩・後輩の壁を作らずとても親しく接してくれた。応援部も含め、部屋全体が兄弟の集まりのようで笑いが絶えなかったようと思える。楽しいから足繁く通った。

応援の練習。発声、先輩達をまねて「ソレー」すぐに息苦しくなる。「初めは強く吹き出すように、中は勢いにまかせて流す。最後に又、強く吹き出す」とのアドバイス、なるほど楽になった。

次に拍手のリード。当時のスタイルは、足を前後左右に、手を上下左右に運びながら踊るようにしてタクトを刻む。本番はダッグアウトの上。そこを舞台と考えて幅広く使い、かつ、応援者席にも左右

押忍
創立100周年を迎え、
更なる繁栄を祈念し、
エールを贈ります。
高崎高校應援部OB会

手落ちなく気を配る。皆が同じようなスタイルなのだが決まった手順はない。〝初めに左手を上げる〟とか、〝右足から踏み出す〟とか。先輩達の動きを見ながら自れの手順・型を一人ひとり、こつこつ努力して作った。

私は、人前で歌うのは平気だが踊るのはちょっと恥かしかった。先輩の目にはもどかしかったのだろう、「やる気がない」と叱咤されたものだ。今でも結婚披露宴などでエールのリードをするが、最近、ようやく恥かしさもなくなり、喜ばれるのならと進んでやるようになった。

野球の大会近くなると、放課後・生徒を講堂に集めて応援の練習をする。この時、応援部員は放課のベルとともに校内を封鎖する、校門ではいつも押し問答が繰り返された。

私は良く、校舎北側の堀の所に立ったのを思い出す。要領の良い人は休み時間中に自転車を校外に出しておいて堀を渡って逃げ出す。私は単細胞だから言われるまま逃げる者を追いかける。この時だけは先輩でも、余り抵抗せず言うことを聞いてくれた。

一〇〇周年に寄せて

藤井　正弘（81期）

卒業してからも、ときどき母校の先生方のお話をお聞きする機会があります。最近は、現役で東大に合格する生徒が二十名ちかくいるとか。

私の現役当時は、一浪して入ればいいという考えの学生が結構いて、学業以上にスポーツや遊びに夢中になっていた仲間がたくさんいました。当時は、全国大会に出場する運動部がいくつもあって、自由闊達な校風のなかで、それぞれが楽しく高校生活を送っていたように思います。

もともと、勉強が嫌いな私にとって、東大は、夢のまた夢ではありますが、一流高校、一流大学、一流企業へ入ることだけを目的にした最近の教育には少し疑問を感じます。省庁の官僚になれたとしても、そこには学歴エリートがうじゃうじゃいて、「出世」という競争が待ちかまえている。大学受験にしろ、就職試験にしろ、自分が求め、目標にしたモノを手に入れるための手段に過ぎないのです。そこから先は、経歴ではなく「バイタリティ」、「スペシャリティ」、「オリジナリティ」、「プレゼンテーション」、「コミュニケーション」といったVSOP＋Cのさまざまな能力が要求されます。知識の詰め込み教育だけでは、社会が求めているバランスの取れた人材にはなれません。管理教育のなかで個性が薄れ、金太郎飴のごとくマニュアル化された社会人を輩出するような高校になって欲しくないのです。社会に出れば、専門知識を必要とする分野を除けば、教科書で学んだことが生かされる機会はあまりない。組織の歯車でよしとしないのであれば、豊かな個性や表現能力、人間関係を大切にする心が必要です。

「自由闊達」「文武両道」それと3F精神の1つ「フロンティア　スピリット」の高崎高校こそ私が誇りに感じている高崎高校なのです。このような校風だったからこそ、歴代総理大臣をはじめ、財界にも素晴らしい先輩方を世に出してのではないでしょうか。

いまでは、無くなってしまったと聞きますが、当時は「授業カット」というものがありまして、四時限の日など一時限目から四時限まで全ての授業が、先生のご都合で自習となることがあり、登校してすぐに帰ってもいいというのがありました。また、自習の時間に五時限、六時限の授業を先生にお願いして繰り上げて頂き、午前中で授業を終わりにしてしまうこともできました。空いた時間をそれぞれが、図書室での自習や仲間と街に出て遊んだりと、思い思い過ごしました。先生方のご理解と、個人の自主性を尊重して頂けたからこのようなことができたのだと今になって思います。

家と学校との往復だけでは得られない豊かな感性が、その空いた時間やクラブ活動を通して育まれるのではないでしょうか。

甲子園球場のアルプススタンドで三〇〇〇人近くの応援団の前で、校歌の指揮をとったことが、私の人生に大きく影響していることは間違いありません。

祝　高崎高校創立100周年

高崎高校水泳部

ＯＢ会一同

田中　彰さんを偲んで

サッカー部　佐藤　義夫

田中　彰さん

翠巒体育会、又、機関誌の生みの親でもある田中彰さん（50期）の訃報を聞いたのは、去る三月二十二日深夜のことでした。

奥様からの連絡で病院に駆けつけ、ベッドに眠るが如く横になっている姿に言葉もなく、未だ暖かい体を車に乗せ、御自宅に安置しても余りに突然の御逝去は信じられぬ思いでした。

田中さんはサッカー部OBでもあり、長く高女に勤められ、その後、富岡、万場そして母校の教諭になられサッカー部顧問として学校とOB、当会のため色々と御協力いただきました。特に当会機関誌〝翠巒体育〟の編集責任者として創刊時より長い間御苦労戴きました。

第一号は体育会発足の翌年（昭和五十年）に発刊されましたが、その編集会議は田中さん宅で数日間、夜遅くまで行われました。掲載内容、レイアウト等、田中さん持ち前の肌理の細かさで編集に当たっていただき、その後の我々担当者の勉強になりました。又、奥様にはプロとしての腕で挿絵を書いて戴き御協力戴きました。お陰様で立派な第一号ができ、内外の皆様にお誉めの言葉を頂戴致しました。私も携わった一人として嬉しかったことを昨日の事の様に思い出します。

退職後は現役の試合には必ずどこのグラウンドでも応援に出掛け、生徒の活躍を見守っていました。又、OB初蹴り会、家族新年会、父兄会等にも欠かさず出席され、温厚な話し方で楽しそうにしていた顔が忘れられません。

行年も六十五歳は余りに早く、今後も色々な面で御指導、御協力をと思っておりましたのに残念でなりません。御冥福をお祈り致します。さようなら校長さん。

合掌

同窓会ゴルフ大会レポート

優勝は武藤誠一（55期）さん　ベストグロスは田島創志（94期）さん

第三回高高同窓会ゴルフ大会は平成8年11月22日㈮・県営新玉村ゴルフ場にて行われました。当日はうす曇り、微風の絶好のコンディションで、高商・高工・農二のゲストプレヤーの参加も得て、総勢一二〇名の参加によって催されました。今回も最年長は45期の室賀さん等で、最年少は日大ゴルフで活躍中の94期の田島さんでした。

■ネット

順位	期	氏名	グロス	HC	ネット
1	55	武藤　誠一	79	9.6	69.4
2	71	堤　康高	84	13.2	70.8
3	56	忰田　昇	93	21.6	71.4
4	66	小野里篤雄	80	8.4	71.6
5	69	長井　康博	97	25.2	71.8
6	60	藤原　陸男	95	22.8	72.2
7	71	坂本　勝則	95	22.8	72.2
8	94	田島　創志	77	4.8	72.2
9	60	大月　久雄	100	27.6	72.4
10	62	須藤　敬文	88	15.6	72.4
11	49	平田　英治	99	26.4	72.6
12	商	御供誠太郎	93	20.4	72.6
13	60	原　巌	93	20.4	72.6
14	55	沼賀　勝平	80	7.2	72.8
15	農	金子　和夫	85	12.0	73.0
16	52	金井　泉	94	20.4	73.6
17	57	中沢　建晶	99	25.2	73.8
18	52	菊地　俊二	86	12.0	74.0
19	58	山口　正敏	86	12.0	74.0
20	60	斉藤　宏明	98	24.0	74.0

■グロス

順位	期	氏名	アウト	イン	グロス
1	94	田島　創志	37	40	77
2	55	武藤　誠一	40	39	79
3	55	沼賀　勝平	39	41	80
4	66	小野里篤雄	39	41	80
5	65	澤田　真治	38	45	83
6	71	堤　康高	43	41	84
7	農	金子　和夫	42	43	85
8	71	宮部　茂樹	43	42	85
9	52	菊地　俊二	41	45	86
10	58	山口　正敏	42	44	86
11	62	川手　義昭	41	45	86
12	64	城田　明彦	45	42	87
13	58	佐藤　義夫	45	43	88
14	62	須藤　敬文	44	44	88
15	55	内山　正則	44	45	89
16	61	井上　勝介	45	44	89
17	工	清水　光司	46	43	89
18	52	川鍋　順一	45	46	91
19	69	八島　達彦	48	44	92
20	70	飯野伸太郎	44	48	92

○先輩頑張ってます　　現役の抱負①

陸上部

岸　義真

現在、私達陸上部は一人一人が自らの到達すべき目標を持ち、日々の厳しい練習に積極的に参加し、競技力、精神力の向上に努めています。

また私達は他校の陸上部とは違い、身近にある、恵まれた練習環境を用い、かつて、アジア大会において十種競技を制した実績をもつ顧問の岩井寿史先生の指導により技術・体力アップを図ることはもちろん、社会に出ても立派に対応できる人間性の向上にも努めています。そして全員が徐にではありますが、両方の目標を達成しつつあります。

そうした中で、近年は多くの者が県大会において入賞し、関東大会はもちろんのことその上のインターハイ・国体入賞を目指せるようになりました。今年は総体において、総合優勝を達成することを部の第一の目標として、練習しています。

先輩方が長い間育て上げてきた陸上部の伝統を更に輝かしいものとする為に部員一同これからも頑張っていきますので応援お願い致します。

卓球部

杉浦　雅志

僕達卓球部は、三年生六名、二年生十四名、一年生八名と人数も例年より多く明るく活発に練習しています。

顧問の加藤先生の掲げる、「組織的かつ能率的なチーム作り」を目標にして、団体戦は常にベスト8入りを目指しています。

例年は、体育館の改修工事に伴い、体育館の使用が出来ず、三ケ月程練習が出来なかったこともあり、前高との定期戦で大敗を喫してしまいました。しかし、それをバネにして、選手の自主性に任せて、個人で練習を積んだところ、新人戦の団体で惜しくも桐生高校に負けはしたものの、ベスト8入りを果たしました。僕達三年生の最後の試合となる、総体でも、部員一丸となり、団体戦ベスト8入りという、満足いく結果が残せました。

現在、新体制となり、新しい規則を設けたりして、今まで以上の練習の密度を高めていきます。僕達三年生も、部活を引退してからも後輩の指導に行ったりもします。部員一同一生懸命にチーム力向上に励んでいますので、これからも卓球部を応援して下さい。

軟式庭球部

斎藤　亮

高々ソフトテニス部は、インターハイ出場を目指し、部員一丸となって練習に励んでいます。

今年の県総体では、団体戦での関東大会出場は果たせなかったものの、個人では三組の出場を果たすことができました。昨年の成績から見るとこれは大きな成果です。

しかし、僕たちはまだまだ力不足です。現在、県内の強豪チームは、前橋商業、農大二高、渋川です。どこも実力は同じくらいで、どこが勝つかわからない状態です。インターハイ予選では、これらのチームに勝てるように、さらなる技術強化をしていかなくてはなりません。そして必ずや団体でのインターハイ出場を果たしたいと思っています。

最後になりましたが、日頃からお世話になっているOBの方々に、御礼を申し上げると同時に、これからも御支援・御声援よろしくお願いします。

バスケット部

高橋　宏行

現在、我々バスケット部は三年十二人、二年九人、一年十九人で、インターハイ目指し、活動しています。

バスケット専用のフロア、そして、立見先生、水上先生、町田先生、それから近日よりお世話になっている立見先生の教え子の青柳さんと、すばらしい環境と、先生方のご指導により、新人戦準優勝と、苦い思いをしたものの、高校総体では、優勝をつかみ取ることができました。

しかし、ベスト4決めの試合では、前半まさかの大幅なリードを許し、準決勝では、残り2分まで大接戦でした。けれど、高々の目指す粘り強いディフェンスと、集中力で、決勝戦まで行くことができました。今大会優勝したことで追う立場から追われる立場になり、一層チームディフェンス力が必要とされます。そのためにも、関東大会でも通用する高々バスケットを再度強化するため、最終目標であるインターハイ出場のために、頑張っています。

最後に、今日まで先輩方の築いてくださった伝統を守り、そして新たな伝統を築くことができるようバスケット部の一層の発展をどうぞ見守り下さい。また、OBの皆様からの御支援、この場をお借りして、御礼申し上げます。

○先輩頑張ってます　現役の抱負②

バレーボール部

曽根　慶則

僕達バレーボール部は、武田杯・新人戦・県総体・インターハイの主に4つの大会に照準を合わせ、顧問の田口先生、関口先生、三浦先生のもとで毎日練習に励んでいます。毎日の練習は約3時間で、夏休みなどの長期の休みや週末の休日を利用して合宿や遠征を行っています。

部員一人一人が自覚と目標を持ち、部活動に積極的に参加して先輩方の築き上げた高々バレー部の伝統に負けないように頑張っています。

他の高校とは違い、練習時間が制約されますが、その分練習内容をいろいろと工夫して、できるだけ効率的に練習しようと努力しています。新入生も新たに加わり、部活が活気づいてきました。

最後に、高々バレー部を支えてくれている顧問の先生方、先輩方に感謝するとともに期待に応えられるように精一杯頑張っていくつもりなので、これからもみなさんのお力添えを是非よろしくお願い致します。

ラグビー部

反町　雄輔

高崎高校の中で恐らく最も伝統と実績のある我がラグビー部は部員数各学年十人前後と決して多くはありませんが、日日集中し、練習に励んでいます。

先輩方にはいつも暖かいご支援を頂き誠にありがとうございます。人数が多くないのでスクラムもマシン相手に練習する時間が多くなっているので、お時間がありましたら是非グラウンドに来て、我々の相手をして下さい。

新人戦ではベスト4を目前にして中央に抽選負けをしてしまいましたが、その後、撤底的に走り込み練習試合を重ね、総体ではその中央に56―0で圧勝しました。そこには俺達高々はこんなところで負けられないという伝統の意地が実った面もあったと思います。我々の目標は農大二高の黄金時代を一刻も早く断ち切ることです。そのためにももっと走り、根性のタックルをやって行くつもりです。

我々には常に「勉強」の二文字がついて回りますが、とにかくやれるとこまでやっていきたいと思いますので、どうぞお力添えをよろしくお願いします。

サッカー部

馬谷　広平

我々サッカー部は、新人戦、県総体、インターハイ、選手権大会以上の大会で優勝することを目標として、毎日一生懸命練習をしています。

また、今年は、新人戦、県総体でベスト4に入ることができました。新人戦では育英に惜しくも延長戦の末、負けてしまい、県総体でも同じく延長戦で負けてしまいました。しかし、この2強と呼ばれているチームを倒す力を我々は、着実につけてきています。そして、これらの試合から得た経験や、自信を生かして、これからの練気にも精進していきたいと思っています。

これからの目標は、インターハイ優勝を成し遂げて全国大会に出場するのはもちろんのこと、サッカー部、一年生から三年生の全てが個人の技術向上、精神力を鍛え、より一層サッカー部が大きくなることです。

OBの皆さんの期待に応えられるようにまた、自分たちの目標を実現させるためにもがんばりますので、これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

水泳部

吉田　茂樹

ぼくたち水泳部は、現在総勢二十七人で日々練習に励んでいます。

主な活動内容は、五月下旬から学校のプールで泳ぎ始め、大会に向けて六月中旬には一週間かけて校内合宿を行っています。そして七月から八月にかけて行われる、関東予選、高校総体、県新人戦で自分自身の力を全て出せるよう、一人一人が目標を持ちしっかりと練習しています。また、シーズンオフには、河川敷を利用して球技をしたり陸上トレーニングをしたりして体を鍛えて、週に一度は浜川の温水プールを利用して練習をしています。

去年水泳部は思うような成績が上げられませんでした。でも今年は関東大会が県営プールで行われることもあり、部員一同少しでも多く関東大会に出場できるよう一生懸命頑張っています。これからいよいよ学校のプールでの活動が始まりますが、自分で練習を考えて、その中で弱点を克服し、そして心身ともに成長をはかり、お互い刺激しあって良い結果が残せればいいと思っています。

最後に水泳部を支えてくれている顧問の先生方、OBのみなさんにお礼を申し上げます。

○先輩頑張ってます　現役の抱負③

柔道部

長井　祐介

我々柔道部は、部員数九名という少数ですが、先輩方が築き上げてきた「伝統」を発展させるべく、日々稽古に励んでいます。毎日の練習の他に、春、夏、冬休みに校内合宿を行っています。合宿ではOBの先輩方や大学生に来ていただき技の講習をしていただいています。

成績におきましては、秋季大会、新人戦、共にベスト4の壁を破ることはできませんでした。しかし、先日行われました県高校総体では常磐高校に2―2の内容で勝ち、四年ぶりに第三位という成績を修めることができました。そして「七年連続関東大会出場」という新たな伝統を築くことができました。

我が高崎高校の柔道は、寺町先生の指導の下、モットーである「弱い者が努力して強い者に勝つ」を掲げ、精進していこうと思います。そして、先輩方が築き上げてきた伝統をくずさないよう、また新たな伝統を築いていけるよう、努力していきたいと思いますので、これからも応援よろしくお願いします。

剣道部

池田　祐一

我々剣道部は、先輩方が築き上げてきた伝統を受け継ぎ、さらに発展させるべく、三年五名、二年十名、一年六名の計二十一名で活動しています。

部内はなごやかな雰囲気で、練習では部員一人一人が目的を持ち、いかに工夫をして、一本取れる技、打ちができるかということを念頭において、短い時間ですが、集中し、毎日一生懸命稽古に励んでいます。

また、「剣友会」の方々には日頃、技術面、精神面、資金面など様々な点で大変お世話になっており、部員一同、大変感謝しております。

そして、県高校総体では、ここ二年連続して関東大会に出場している先輩に続けと、関東大会出場を目指して、チーム一丸となって臨みました。結果は、強豪常磐高校にあと一歩のところで惜しくも敗れ、三年連続関東大会出場はなりませんでした。この敗戦を反省し、残されたあとわずかな時間を有効に使い、我々三年にとって最後の大会であるインターハイ予選では、悔いの残らない堂々とした試合をしたいと思います。

最後になりますが、先生、先輩方のより一層の御指導よろしくお願い致します。

硬式野球部

中山　大輔

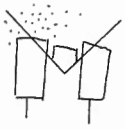
現在、硬式野球部は、三年生四名、二年生十名、一年生九名の計二十三名で樽見部長、佐久間監督そして顧問の先生方の熱心なご指導の下、「甲子園出場」という目標に向かい、チーム一丸となり日夜練習に励んでいます。

我々は、高々という勉強を第一とする学校の中で、勉強はもちろん、部活動にも熱心に取り組み、「文武両道」をしっかりと実践しています。

我々三年生にとって最後の大会であり、「甲子園出場」という目標を達成する最後のチャンスである夏の大会がもう間近に迫ってきて、残された少ない日々を今まで以上に精進し、「可能性」に向かって全力投球していこうと思います。

そして、一試合でも多く勝ち、悔いのない、又高崎高校硬式野球部員として恥ずかしくない試合をしたいと思っています。

最後になりましたが、先輩方のより一層の御指導・応援をよろしくお願いいたします。



応援部

住谷　芳英

我々第四十六代応援団は、今日までに夏の高校野球や定期戦での応援や全校集会での校歌、翠巒の斉唱などを行なってまいりました。

夏の野球応援は、例年通り野球部、吹奏楽部と合同練習を経て臨みました。初めは、思うように皆の気持ちをまとめきれないこともありましたが、試合を重ねる毎に、全員が一丸となり勝利を目指し応援できるようになったと思っております。我々の応援の甲斐あってか、ベスト4まで勝ち進み、応援した我々にとっても喜ばしいことでありました。

定期戦は五十周年ということもあり、TVまで取材に来るほど大大的なものになりましたが、惜しくも前高の前に敗れました。やはり、依然として綱引きは前高に圧倒されており、一般対抗をいかに勝つかという点が大事であると思われました。勝つためには、我々が高々生をもっと団結させる必要があると感じられました。

我々応援団が存在することによって、高々生の団結を高め、高々を日頃から活気に満ちた学校になるよう今後も努力していこうと思っております。先輩方、御支援のほどをよろしくお願い致します。

○先輩頑張ってます　　現役の抱負④

山岳部

吉井　章人

こんにちは、僕は現在の山岳部部長の吉井です。高校総体を終え、やっと山を楽しめる時期になったと部員全員で喜んでいる日々です。

これから、最近の山行、大会の内容について簡単に説明したいと思います。

数ヶ月前の3月二五日から3日間、春合宿があり尾瀬に行きました。寒さと貧粗な食料に悩まされ、苦しい山行となりましたが雪山技術の習得と雪山の素晴らしさを知ることができました。

4月二七日新人歓迎山行を妙義で行いました。今年は部員が少ない為、御岳コース一本だけでしたが、凄い快晴に恵まれて非常におもしろい山行となりました。

5月3日から2日間総体下見を行い、9日から3日間高校総体が行われました。今年は赤城でした。総体の辛さはかねがね先輩方から聞いていたのですが、案の定皆、心身共にがたがたになってしまいました。それでも頑張った甲斐があって6位入賞を果たし、関東大会の出場権を手に入れることができました。

最近の傾向として、山岳部は部員が減少しているのですが、今まで先輩方が築いてきた良い伝統を後々の山岳部員に残していく為に、そして高々山岳部が今まで以上に優秀な山行ができるように、これからも部員全員力を合わせて頑張っていきたいと思います。

硬式テニス部

倉田　陽一

テニス部は一昨年度、昨年度と県団体ベスト4を守ってきましたが、今年度のテニス部は残念ながらいまのところ新人戦、総合体育大会ともにベスト8におわっています。新人戦は現在県内無敵の育英高校に、総体はそれに次ぐ桐生工業に善戦したものの負けてしまました。しかしそれらの敗戦によって確かな手ごたえも感じているのは確かなので気落ちせずインターハイ予選ではベスト4、それ以上を目指して毎日練習にはげんでいます。

毎日の練習では、先生が生徒会の顧問を兼ねているなどおいそがしいため、指導していただけることが少ないので、個々の部員が自主性をもって互いに教えあったりして頑張っています。しかし入部当時25人前後いた現3年生も今は9人しかいないことからもわかるように自主性をもって行なっているといっても決して楽なことをしているわけではありません。

僕達3年生はあとわずかの期間で引退という時期になっています。後輩である一・二年生達には先輩方の築いてこられた伝統に感謝し、また新たな歴史を作っていってほしいと期待しています。

3年生は残りみじかくなってしまった期間をインターハイ予選でくいをのこさないように努力していきたいと思います。

スキー部

瀧本　佳只

今年度から、スキー部の年間予定が少少変わりました。一口でいってしまえば夏の合宿を冬にし、今まであった冬の合宿と合わせての期間を長くとる、ということなのですが、これに本格的な指導者をコーチとして加えるかどうかが、現在検討中です。

そもそも我々は今年、雪不足のせいもあって大会前に予定していた合宿ができず、練習不足のまま大会に臨みました。また関東大会まであと一歩という成績だったので、なおその練習不足が悔やまれました。そんなことから、部員の強い要求もあって冬の合宿の日時、期間、内容が再検討された結果、先のような年間予定の変改にせまられました。

スキーの大会は3年生の冬の時期まで参加資格がありますが、我々高々スキー部員3年のほとんどは入試などもあり、とてもすべってはいられないというので2年の冬で引退してしまいます（中には参加する3年生もいますが）。そんなわけで、我々スキー部3年生は先輩方同様今度の冬の合宿内容がよき結果にでることを願って、今後のスキー部を見守るしだいです。

弓道部

小松　洋平

我々高々弓道部は、現在三年生七名、二年生七名、今年入部した一年生十八名を合わせて計三十二名で活動しています。

弓道部の活動場所としては、学校内にある屋根も壁も床もない通称「青空弓道場」か、高崎市浜川公園内にある弓道場です。学校の弓道場は県内でもめずらしい屋根がないもので、逆に浜川弓道場は北関東最大規模であり、この二つのギャップを楽しみながら練習に励んでいます。

弓道部というと、あまり練習をしない暗い部活だと思われがちですが、そんなことは全くありません。日曜日以外は毎日練習し、時間も六時半頃までやっています。また総体前では一か月半休みなしで頑張りました。

これまでの成績では、新人戦個人四位、総体団体七位で総体では六位まで関東大会出場だったので本当に残念でした。この後にあるインターハイ予選では、団体三位入賞を目指しています。

高々弓道部で一番勝れることは、射型の美しさです。その証拠として有段者が多く、二段が三人もいる弓道部は県内にもほとんどないと思います。的に当てるだけの射ではなく、射の美しさを追い求めて練習しているわけです。

最後に、これから弓道部を引っ張ってゆく後輩達に、良い伝統を引継ぎ、作っていって欲しいと思っています。

○先輩頑張ってます　現役の抱負⑤

空手道部

矢野　孝伸

空手道部は現在三年一人、二年八人、一年三人で活動しています。技術的な指導者がいないせいか、型はあまり普段は行なっていなく組手が中心の練習になっています。

今までの成績を振り返ってみると、型までは手が回らず出場していなく、組手も、あまり良い成績は出せませんでした。

代々先輩から後輩へと技術などを伝えているので今年は、僕一人だけだったので、指導しきれない面がありました。ですが、二年はすぐ試合に出られ、試合を多く経験出来、出場するたびに強くなりたいという願いが強くなりました。そしてみんな積極的に練習に取り組んでいます。また前はあまりやっていなかった、防具を付けた実戦のような練習もよくやっています。結果は出せていませんがみんな空手がうまくなり、強くなったと思います。最後にこれから空手道部を引っ張っていく後輩達に、先輩から受け継がれてきた技術を後輩に受け継ぎ、仲間同志で刺激し合い、みんなで頑張っていってほしいと思います。

軟式野球部

矢島　大樹

我々軟式野球部は、月・水・金の週三回、八千代橋下の河川敷のグランドで練習をしています。練習内容は、キャッチボール、トスバッティング、フリーバッティング、ノックを中心に、バント処理の練習や、中継プレー、サインプレーなどの連繋プレーを重点において週三回という練習量の少なさを克服するような練習を各自心掛けて、頑張っています。

部員は初心者も多く、基礎からスタートする人もいます。それでもレギュラーになってバリバリ活躍する人もいます。初心者でもやっていけるということは、チームの仲間と仲が良く、皆、協力して自主的に練習している証拠だと思います。団体競技において重要なことである「チームが一丸となり目標に向かって努力をする」ということが確実に実践できていると思います。

近年の部の成績は、昨年度の県総体がベスト4、夏季大会がベスト4、今年度の県総体もベスト4と、安定な成績を残してはいるものの、ベスト4という壁が突破できない状態です。次こそは優勝を目指して、先輩方の期待に背かないよう監督、選手が一丸となって頑張っていきたいと思います。

現役運動部競技日程

平成9年度7月より抜萃して掲載

◇陸上競技
7月20・21　全国高校混成県予選強化大会
8月1～5　全国高校総体
23～24　国体県予選
10月18・19　県高校新人大会
11月5　県総体(駅伝)関東全国予選

◇バスケットボール
7月20日　国体予選
8月2～7　全国高校総体
10月28　全国センバツ二次予選
11月　各地区新人大会
12月23～29　全国高校選抜
1月15・18　新人大会
2月7・8　関東新人大会

◇バレーボール
7月12　国体予選
11月9・16　秋季大会
1月15・25　新人大会全国選抜一・二次
2月1　新人大会全国選抜三次予

◇ソフトテニス
7月12・13　国体予選
8月1～4　全国高校総体
9月20・21　新人大会（個人）
27　新人大会(団体)高校選抜一次予
11月23・24　全国選抜二次予選

◇卓球
9月23　県選手権全日本予
11月22　新人大会(団)関東選抜予選
2月8　新人大会(個)

◇ラグビー
9月7・13・21・27　一年生大会
10月5・10・19・25　11月2・8
県高校選手権全国予選
1月10・18・24　2月1・8
新人大会
県高校7人制大会

◇サッカー
3月15・21　一年生大会
7月12～24　県高校選手権全国予選
9月7～14　県高校選手権全国予選
10月10・11　県高校選手権全国予選
11月9・16　県高校選手権全国予選

12月31～1月8　全国高校選手権
1月10～31　新人大会
2月1　新人大会

◇水泳
7月5～6　県高校選手権関東予選
25～27　関東高校大会全国予選
29～8月1・2　県総体
8月4　国体県予選
23　新人大会
9月7　県選手権
21　県選手権
1月18　県記録会

◇山岳
8月4～8　全国高校総体
10月24～26　集中登山(新人大会)
11月8～10　関東高校大会

◇柔道
8月7～10　全国高校総体
11月8　新人大会
1月17・18　新人大会全国予選
3月20・21　全国高校選手権

◇剣道
9月20・21　県高校選手権
11月8　一年生大会
1月24　新人大会全国選抜予

◇軟式野球
7月24～30　全国高校選手権県予
8月5・6　北関東大会
9月14～10月12　新人大会秋季関東予

◇弓道
7月21　関東高校個人選手権県予選
8月1～4　全国高校総体
10月11　地区大会（4地区）
11月8日　新人大会全国選抜県予
3月24～26　全国高校選抜

◇テニス
8月17～26　新人大会（個人）
10月25　11月2・3・8
新人大会（団体）
12月25～27　関東高校選抜・全国選抜予
1月24　強化大会

◇空手道
9月13　1・2年生大会
23　県新人大会
11月8・9　新人大会関東選抜予

平成八年度　運動部活動状況

①平成八年度県総体
②関東大会県予選
③関東大会
④全国高校総体県予選
⑤全国高校総体
⑥山梨国体
⑦県高校新人大会（その他）

◎陸上部
④100M　11秒19　浅見　2位
400MH　53秒77　藤岡　1位
3000M　9分32秒59　武藤　3位
走幅跳　6M87　岸　2位
円盤投　41M88　天野　3位
団体総合　高崎高校　4位
⑧県混成競技選手権兼強化大会
110MH　16秒70　横田　3位
走高跳　1M90　横田　3位
三段跳　13M67　岸　2位
⑧県高校対抗戦
100M　11秒4　大井　3位
4×100Mリレー　42秒22
大井・岸・藤丘・浅見　2位
走高跳　1M85　足立　3位
槍投げ　55M50　大井　2位
⑦県新人大会
走高跳　1M85　横田　2位
走幅跳　6M84　岸　1位
三段跳　14M21　岸　1位
⑧県高校駅伝　参加28校　第14位
⑧県新人駅伝　参加26校　第10位

◎バスケットボール部
①②1回戦　高崎103—71桐西
2回戦　高崎121—19渋工
3回戦　高崎125—48渋川
4回戦　高崎95—53前工
準決勝　高崎73—57前南
決勝　高崎67—65樹徳　優勝
⑧関東新人大会
高崎74—82京北・東京都
⑧県選手権兼全国選手権県予選
1回戦　高崎108—38吉井
2回戦　高崎87—49桐西
3回戦　高崎101—32西邑楽
4回戦　高崎89—48太商
準決勝　高崎80—43太田
決勝　高崎80—53樹徳　優勝
⑧全国選手権大会
1回戦　高崎70—77海南・徳島県
⑧県強化大会県全国選抜優勝大会県予選
Aブロック1回戦　高崎96—68前工
2回戦　高崎77—54高商
3回戦　高崎78—62前橋
ブロック決勝　高崎71—75樹徳
2次予選準決勝　高崎101—59桐南
決勝　高崎65—85樹徳　2位
②⑦1回戦　高崎74—42関学
2回戦　高崎115—29吉井
3回戦　高崎77—44伊市高
ブロック決勝　高崎98—55前橋
決勝リーグ　高崎62—42桐南
高崎59—51前商
高崎90—94樹徳　2位
⑧関東新人大会
1回戦　高崎71—75東和大昌平・埼玉

◎バレーボール部
①②4回戦　高崎2—0太工
5回戦　高崎2—0高東
準決勝　高崎0—2太東　3位
③1回戦　高崎1—2横浜商大・神奈川
④4回戦　高崎2—0農二
5回戦　高崎2—0前橋
準決勝　高崎0—2桐商　3位
⑧秋季大会（竹田杯）
2回戦　高崎2—0藤工
3回戦　高崎2—1中之条
4回戦　高崎0—2高北　ベスト8
⑦兼選抜県予選
4回戦　高崎2—0桐生
5回戦　高崎0—2桐西　ベスト8

◎軟式庭球部（ソフトテニス部）
①②2回戦　高崎2—1太工
3回戦　高崎2—1伊市工
ブロック決勝　高崎2—0中之条
ブロック1位
決勝リーグ　高崎0—3農二
高崎1—2渋川
高崎0—3前商　4位
③個人　2回戦
小板橋・設楽4—3大泉・東京
3回戦
小板橋・設楽2—4土浦日大・茨城
④1回戦　高崎3—0関学
2回戦　高崎2—0伊工
3回戦　高崎2—1高商
準決勝　高崎0—2前商　ベスト4
⑤個人1回戦
小板橋・設楽2—4桜宮・大阪
⑧国体二次予選個人
小板橋・設楽ブロック3位
⑦2回戦　高崎3—2渋工
3回戦　高崎2—0富岡
4回戦　高崎2—0太工
準決勝　高崎2—0太田
決勝　高崎2—0農二　団体優勝
⑧選抜大会2回戦　高崎3—0富岡
3回戦　高崎1—2渋川
ベスト4

◎卓球部
①②④兼選手権県予選
1回戦　高崎3—2館商工
2回戦　高崎2—3安実
⑧選手権2次予選
1回戦　高崎3—0渋工
2回戦　高崎0—3前商
⑧強化大会個人8回戦
岸2—0今井・樹徳
準決勝　岸0—2高居・樹徳　ベスト4
⑦2回戦　高崎3—0高商
3回戦　高崎3—0桐工
ブロック決勝　高崎0—3桐生
ブロック2位
⑧強化練習会個人
1回戦　岸2—0湯本・渋川
2回戦　岸2—0野沢・太田
決勝　岸2—1塩の谷・桐生　優勝

◎ラグビー部
①②1回戦　高崎79—0富岡
2回戦　高崎36—10県央
3回戦　高崎18—19前橋　3位
④3回戦　高崎41—7渋川
4回戦　高崎3—39農二
⑦1回戦　高崎23—14高商
2回戦　高崎24—24中央・抽負

◎サッカー部
①②4回戦　高崎1—0高北
5回戦　高崎0—1前橋　ベスト8
④4回戦　高崎2—3常磐
⑧選手権県予選
1次2回戦　高崎6—0渋工
ブロック決勝　高崎4—0前南
ブロック1位
決勝トーナメント
1回戦　高崎6—0前橋
2回戦　高崎0—3育英　ベスト8
⑦1回戦　高崎5—0玉村
2回戦　高崎9—0太工
3回戦　高崎3—0伊商
4回戦　高崎5—0前橋
準決勝　高崎0—2育英　3位

◎水泳部
②兼県選手権
二百個メ　中西　3位
四百個メ　中西　3位
③二百個メ　中西予　39位
四百個メ　中西予　31位
①四百個メ　中西　3位
⑦五十自　小柏　3位
百バタ　清水　3位
二百バタ　清水　1位
四百メ　黒崎・金井・清水・小柏　3位

◎柔道部
①②2回戦　高崎4—0渋西
3回戦　高崎2—0前工
4回戦　高崎2—2丸桐一　5位
⑧県選手権2回戦　高崎4—0藤岡
3回戦　高崎4—1富実
4回戦　高崎0—2前商　ベスト8
個人・中量級　長谷川2位
⑥国体県予選・個人—86キロ　長谷川　2位
⑦1回戦　高崎3—1渋工
2回戦　高崎1丸—1農二
3回戦　高崎0—4常磐　ベスト8
⑧選手権1回戦　高崎2残—利商
2回戦　高崎2残—富岡
3回戦　高崎—2残前商　ベスト8

◎剣道部
①2回戦　高崎2—1樹徳
3回戦　高崎3—0太工
4回戦　高崎2—1渋工
準決勝　高崎2—1前西　3位
③予選リーグ
高崎1—4土浦日大・茨城
高崎2丸—2川越初雁・埼玉　予選敗退
④2回戦　高崎4—1太工
3回戦　高崎3—2農二
4回戦　高崎3—2高工
準決勝　高崎1—1代高商　3位
⑧学校対抗選手権
2回戦　高崎0—2勢農
⑧1年生選手権　高崎Aベスト8
⑦1回戦　高崎5—0中之条
2回戦　高崎0—4高商

◎軟式野球部
②1回戦　高崎3—1桐生
2回戦　高崎1—0前橋
準決勝　高崎5—6前工　3位
⑧選手権県予選
1回戦　高崎3—2前南
2回戦　高崎1—0桐工
準決勝　高崎2—5高商　3位
⑦1回戦　高崎2—1高商
2回戦　高崎0—3前南

◎硬式庭球部
①②1回戦　高崎2—1桐西
2回戦　高崎2—0前西
3回戦　高崎2—1伊東
準決勝　高崎2—0育英　3位
④ベスト8チーム
1回戦　高崎2—1太商
2回戦　高崎0—2桐工　3位
⑦1回戦　高崎4—1西邑楽
2回戦　高崎3—1伊東
3回戦　高崎1—3育英　ベスト8

◎空手道部
①②1回戦　高崎1—4前橋
⑦1回戦　高崎0—5前橋

◎硬式野球部
②春季関東大会県予選
1回戦　高崎5—4館林
2回戦　高崎1—11育英
⑧全国高校野球選手権県大会
1回戦　高崎10—3安中実
2回戦　高崎12—4桐生西
3回戦　高崎10—6関学大附
4回戦　高崎13—7太田工
5回戦　高崎0—12常磐　ベスト4
②秋季関東大会県予選
1回戦　高崎6—9渋川

第32回高校総体成績一覧

◎バスケット
2回戦　83—44桐商　3回戦　73—23渋工　4回戦　103—47藤北　準々決　76—73前工　準決勝　59—53桐南　決勝　71—54高商　優勝　関東大会へ

◎バレー
4回戦　2—0伊商　準々決　0—2前橋　第5位

◎ソフトテニス
(個人)神戸・高橋、下山・大沢ベスト16
小瀧・富岡　第3位　3組とも関東大会へ
(団体)2回戦　3—0板倉　3回戦　2—0高商　準々決　2—0中条　決勝リーグ　第4位

◎卓球
1回戦　3—1伊東　2回戦　3—0中央　3回戦　3—0伊工　準々決　0—3樹徳　第5位

◎ラグビー
1回戦　107—0常磐　準々決　52—0中央　準決勝　7—86農二　第3位

◎サッカー
4回戦　1—0太商　準々決　4—1富岡　準決勝　1—2前商(延長)　第3位

◎山岳
第6位　関東大会へ

◎柔道
2回戦　4—1沼田　3回戦　3—0富岡　準々決　2—2常磐(内容)　準決勝　1—2興陽　第3位　関東大会へ

◎剣道
1回戦　4—1桐工　2回戦　5—0興陽　3回戦　2—3常磐　ベスト16位

◎軟式野球
1回戦　8—1長野原　準々決　1—0前南　準決勝　3—4桐一(延長15回)　第3位

◎弓道
予選　5位で通過　第7位

◎テニス
2回戦　3—0高経　3回戦　2—0高東　準々決　0—2桐工　第5位

◎空手道
1回戦敗退

平成8年度　**翠巒体育会会計報告**　平成9年3月31日まで

収入の部		支出の部	
項目	金額(円)	項目	金額(円)
前期繰越金	209,873	総会費	269,823
年会費・総会会費	485,000	会議費・諸会費	188,599
諸会議会費	107,000	会報第15号	300,000
同窓会助成金	300,000	通信費・事務費	128,260
バザー売上金	84,390	現役大会補助	100,000
合計	1,186,263	合計	986,682
		差引残金	199,581

会計　佐藤　義夫・大崎　哲朗
会計監査　丸山　功一・廣田誠四郎

翠巒体育会役員名簿

(平成9.6.20)

	氏名	回	住所	電話	学校側顧問
会長	山口　正敏	58			学校長・古川　功
副会長(事業)	秋池宗一郎	65			教頭・井本　嘉宣
〃(事業)	川手　義昭	62			運動部長・岩井　寿史
〃(庶務)	横田　茂	55			
〃(庶務)	塚越　章司	58			
〃(庶務)	木村　洋	59			
〃(書記)	林　進一	72			
〃(書記)	庭田登志男	68			
〃(会計)	佐藤　義夫	58			
〃(会計)	高橋　浩生	78			
会計監査	丸山　功一	60			
〃	廣田誠四郎	64			
顧問	国峯善次郎	50			
〃	岩田　武雄	53			
〃	清水　貞保	30			
〃	岡田　由重				
理事					
陸上	横尾　信男	65			岩井寿史・山口和士・柴崎浩明
	坂本　正樹	71			
卓球	深沢　昇	57			加藤　聡・田村修一・品川和男
	根岸　博昭	68			
軟式庭球	丸山　博	68			浦野克彦・関根正史・福田　亨
	下山万吉雄	63			
バスケット	橋爪　良真	75			立見賢治・町田　仁・水上光久
	榊原　一好	79			
	佐藤　弘之	81			
バレー	岩丸　高明	82			田口哲男・関口穂積・三浦昭久
	掛川　稔	82			
ラグビー	増田　一臣	60			櫻井　清・高橋正四郎
	上羽　正弘	72			長岡秀一
サッカー	阿久沢　茂	69			坂田和文・丸山直樹・塩原秋雄
	赤羽　英光	73			
	清野　哲雄	74			
水泳	新谷　恭一	54			安達　淳・松本正志・丸橋　覚
	小此木　勝	56			
柔道	石井　清一	57			寺町良次・箕輪　明・橋本晃一
	関口　茂樹	63			
剣道	藤木　正行	69			栗原大介・戸塚泰聖・宮崎秀明
	飯野　一彦	74			
	小池　政一	77			
野球	小山潤一郎	69			樽見尚人・佐久間秀人
	清水　正郎	75			田村　仁・関口　理・猿谷亮司
	小林　均	77			
応援	永井　功	65			植原政明・田村修一・栗原大介
	堀口　清	65			
	秋山　賢治	74			
山岳					篠原正泰・戸塚英之・福田　亨
					丸山直樹
硬式テニス					塚越　究・小泉誠司・松本正志
スキー・スケート					小林政幸・丸橋　覚・猿谷亮司
弓道					天野正明・宮崎秀明・飯野良二
空手道					斉藤和義・柴崎浩明・植原政明
軟式野球					女屋　浩・橋本晃一・飯塚　光
編集部	大崎　哲朗	77			
事務局					
事務局長	櫻井　清	81			
	浦野　克彦	78			

編集後記

創立百周年事業も成功裡に終えたようです。

今回は〝翠巒体育〟も創立百周年を記念し、特集号として青春の絆を各部全部(12部)の先輩方に願いしました。現役時代に活躍された著名な大勢の方々に投稿戴き充実した内容に思われます。

各部の関係者には広告と原稿集めに御協力を戴きありがとうございました。

また今編集には本機関紙の生みの親ともいうべき田中彰先生にも御参加願い、一月の第一回編集会議には出席下され、いろいろアドバイスを戴きましたが、三月急遽逝去されました。まだいろいろ教えを願わなければならないのに、残念でなりません。御冥福をお祈り致します。

(丸山・60期)

翠巒体育　第十六号
平成九年六月二六日発行
翠巒体育会事務局
〒三七〇
高崎市八千代町二-四-一
群馬県立高崎高等学校内
電話
〇二七三(二四)〇〇七四
印刷　㈲オーサキ